臨泣（膽）　晴明（膀）　攢竹（膀）　迎香（大）

顴髎（小）　絲竹空（三）　頭維（胃）　下關（胃）　禾髎（大）

肩貞（小）　心俞（膀）　白環俞（膀）　天牖（三）　春中（督）

乳中（胃）　周營（脾）　淵腋（膽）　鳩尾（任）　人迎（胃）

急脉（肝）　少商（肺）　魚際（肺）　經渠（肺）　腹哀（脾）

中衝（心包）　陽關（膽）　陽池（三）　隱白（脾）　天府（肺）

條口（胃）　地五會（膽）　犢鼻（胃）　陰市（胃）　漏谷（脾）

髀關（胃）　委中（膀）　陰陵泉（脾）　殷門（膀）　伏兎（胃）

承扶（膀）　申脉（膀）

2、禁鍼穴

左の二十八穴を鍼の禁穴とす。

神庭（督）　顱會（督）　百會（督）　腦戸（督）　絡却（督）

玉枕（膀）　承靈（膽）　角孫（三）　顱息（三）　承泣（胃）

缺盆（胃）　膻中（任）　雲門（肺）　神道（督）　靈台（督）

鳩尾（任）　水分（任）　神闕（任）　横骨（胃）　氣衝（胃）

青靈（心）　五里（大）　三陽絡（三）　會陰（任）　箕門（脾）

承筋（膀）　羊矢（肝）　急脉（肝）

3、婦人禁穴

鍼灸の禁穴……石門（任）

鍼の禁穴……合谷（大）　三陰交（脾）

尙妊婦は總べて腹部の穴を禁す。

4、小兒禁穴

鍼灸の禁穴……三里(胃)

Ⅱ、各經絡に於ける禁穴

總べての禁穴を十四經絡に分類して見ると左の如くなる。

1、禁灸穴

第一、手太陰肺經　四穴
　天府　少商　魚際　經渠

第二、手陽明大腸經　二穴
　迎香　禾髎

第三、足陽明胃經　九穴
　下關　頭維　人迎　乳中　髀關　伏兎
　陰市　條口　犢鼻

第四、足太陰脾經　五穴
　陰白　陰陵泉　腹哀　周榮　漏谷

第五、手少陰心經
　無し

第六、手太陽小腸經　二穴
　肩貞　顴髎

第七、足太陽膀胱經　十穴
　睛明　攢竹　承光　天柱　心兪　白環兪
　承扶　殷門　委中　申脉

第八、足少陰腎經

無し

第九、手厥陰心包經　一穴

中衝

第十、手少陽三焦經　二穴

天牖　陽池

第十一、足少陽膽經　五穴

臨泣(頭)　淵腋　陽關　地五會　絲竹空

第十二、足厥陰肝經　一穴

急脉

第十三、任脉經　一穴

鳩尾

第十四、督脉經　四穴

素髎　風府　痞門　脊中

2、禁鍼穴

第一、手太陰肺經

無し

第二、手陽明大腸經

無し

第三、足陽明胃經

無し

第四、足太陰脾經

無し

第五、手少陰心經
無し

第六、手太陽小腸經
無し

第七、足太陽膀胱經
無し

第八、足少陰腎經
無し

第九、手厥陰心包經
無し

第十、手少陽三焦經
無し

第十一、足少陽膽經　一穴
承靈

第十二、足厥陰肝經
無し

第十三、督脉經　四穴
神庭　顱會　百會　腦戸

第十四、任脉經　一穴
鳩尾

Ⅲ、身體各部に於ける禁穴

1、禁灸穴

總べての禁灸穴を身體の各部に分類して見れば左の如し。

一、頭部　六穴　承光　風府　天柱　頭維　天牖　臨泣

一、顏面部　八穴　素髎　晴明　攢竹　迎香　絲竹空　下關

一、頸部　二穴　禾髎　顴髎

一、背部　三穴　痞門　人迎

一、胸部　三穴　脊中　心兪　肩貞

乳中　周榮　淵腋

一、腰部　一穴　白環兪

一、腹部　三穴　鳩尾　腹哀　急脈

但し妊婦は、天樞、滑肉門、太乙、關門、梁門を禁ず。

一、上膊　一穴　天府

一、前膊　二穴　經渠　陽池

一、手　三穴　少商　魚際　中衝

一、大腿　七穴

髀關　伏兎　陽關（膽）　殷門　承扶　陰市

委中

一、下腿　四穴

漏谷　條口　犢鼻　陰陵泉

但し小兒は三里胃經を禁ず。

一、足　三穴

地五會　申脉　隱白

2、禁鍼穴

總べての禁鍼穴を身體各部に分類して見れば左の如し。

一、頭部　九穴

神庭　顱會　百會　腦戸　絡却　玉枕

承靈　角孫　顱息

一、顏面部　一穴

承泣

一、頸部　一穴

缺盆

一、背部　二穴

神道　靈台

一、胸部　二穴

膻中　雲門

一、腹部　五穴

鳩尾　神闕　水分　横骨　氣衝

一、側腹部列外　二穴

急脉　羊矢

一、會陰部　一穴

會陰

一、上肢　三穴

青靈　五里　三陽絡

一、下肢　二穴

箕門　承筋

Ⅲ、禁灸の理由

禁灸四十六穴、禁鍼二十八穴が用ふ可からざる穴所と爲りたる理由に就ては、或に經驗上でこれを定めたるものか、或は經絡の學理に基いて定めたるか、未だこれを研究し得ず、中には解剖生理學上から考へて略これを解し得るものあれど、或は全く其理が不可解のものもある。

禁鍼に就ては予は其智識を有せざるを以つてこれを説明するを得ず。

今禁灸に就て其理由を考へて見れば

一、頭部に在るもの

承光　風府　天柱　頭維　天牖　臨泣

以上は腦に接近せるため。

一、顏面に在るもの

素髎　晴明　攢竹　絲竹空　禾髎　顴髎

下關　迎香

以上は幾分腦に接近すること、灸痕が容貌に醜を貽すため。

一、頸部に在るもの

瘂門

延髓に接近するため。

人迎

總頸動脈及び同名靜脈に接近するため。

一、**胸部に在るもの**

乳中

乳嘴上にて其灸痕が乳汁排泄管を破壞する恐れあるため。

一、**腹部に在るもの**

鳩尾

心臟及び横膈膜に接近するため。

急脉

精系に接近するため。

一、**上膊に在るもの**

天府

上膊動脈に接近するため。

一、**前膊に在るもの**

經渠

橈骨動脈の搏動部に當るため。

一、**大腿に在るもの**

承扶　殷門

坐骨神經の經絡に接近するため。

一、**下腿に在るもの**

陰陵泉

サフェナ神經の經路に接近するため。

犢鼻　陽關

膝關節部に接近して皮膚が最も菲薄なる部なるため。

一、其他手に在るもの

魚際　少商　中衝

一、足に在るもの

隱白

此手足にあるものは感覺の最も鋭敏なる部位なるため。

以上は略其理由を解し得るのであるが、之に反して、其理由を知るに苦しむものは

肩貞　白環兪　心兪　周營　淵腋　腹哀

陽池　伏兎　髀關　陰市　漏谷　條口

申脉　地五會　脊中

等である。併し以上の內でも

脊中

脊髓に接近するため。

陽池

腕關節に接近するため。

申脉　地五會

感覺の最も鋭敏なる部位なるため。

等の理由に依り、禁穴たる意味を推測することが出來る。けれども、其の他の

肩貞　白環兪　腹哀　伏兎　髀關　陰市

漏谷　條口

等の諸穴は全く禁穴の理由を知ることが能きないのである。

V、禁穴にあらざる禁灸の穴

古來の禁穴に關せず只解剖學上にて、灸療の禁穴とせねばならない部位は大凡そ次に擧ぐる五項に當る部位とす。

一、大血管、大神經幹の通路が皮下に近く在る部位。

一、重要なる臟器に接近する部位。

一、灸療に依りて、後に其瘢痕のため、機能障碍を貽こす部位。

一、灸痕が容貌に醜を貽こす部位。

一、知覺最も鋭敏にして灸熱に堪へ難き部位。

即ち腦に接近する頭部の經穴と、灸痕が其容貌上に醜を貽こす顏面の經染は全部これを應用せざる方が良とす、又前胸部の心臟に接近する部位の經穴も禁ずべく、其他

上膊動脈に接近する

尺澤　曲澤

尺骨神經に接近する

小海

橈骨動脈に接近する

大淵

等の如き皆其應用に注意を要するもので、成る可くこれを禁穴とする方が良い。斯の如き意味を以て、左に擧ぐる經穴は禁穴にあらざるも禁穴と同じく成るべく其應用を避くる方が良いので、予はこれを解剖學的禁穴と云ふ、而して古來定められたる禁穴はこれを經絡的禁穴と稱することにする。

解剖學的禁穴

神庭　上星　顖會　前頂　後頂　强間

經絡篇

腦戶曲差五處通天絡却玉枕
目窓正營承靈腦空本神領脈
懸風上懸鐘水翳四白髓谷率天衝
水溝兌端關靈曲尺澤承漿或巨髎地倉
翳鳳神封斷泉頤大淵中神藏
懸壺屋承山交尺澤少府
泉墟

經絡篇

第一章　人體の臟腑

I、臟と腑

人體の內臟を分類して臟と腑となし、其重要なるものを六臟六腑とす、即ち肺、心、心包、脾、肝、腎を臟と云ひ、大腸、小腸、三焦、胃、膀胱、膽を腑と名く。

臟と腑とは元來外觀上の形態を以つてこれを區別すべきものにあらざれども、

概して言へば、腑は體内に在つて間接に外界と接觸するもので内腔なる嚢狀或は管狀のものを云ふ、臓は體腔の内部に在りて外界に接觸せざるものにして總べて内部が充實せるものを云ふ。

但し肺は特例として外界に交通す。

臓	肺	心	心包	脾	肝	腎
腑	大腸	小腸	三焦	胃	膀胱	膽

此六臓六腑の内、臓の心包と、腑の三焦とは解剖的に指示すべき形態を有するものに非らず、只其機能を以つて有形に表現し其存在を假定したるもので、即ち**生理學的無形の臓腑**とす。

此等臓腑の所在に就ては、即ち三臓は胸腔に、他の三臓は腹腔に在り、而して六腑は皆腹腔に存す。

臓腑の所在

臓	胸部	腹部
肺、心、心包		脾、肝、腎
腑	胃、大腸、小腸、膽、三焦、膀胱	

II、無形の臓腑

普通臓腑の解剖學的狀態及び生理學の機能に就ては解剖學、生理學に於て已に人の知るところであるので述べる要はないが、此無形の臓腑に就いては嘗て其詳說したるものなく、ために誤れる見解をなすものが多いので予は茲に其誤を述べて學者の參考となさんと思ふ。

1、心　包（臟）

血液循環は心臟から血液が動脈へ流出し、全身の毛細管を經て靜脈を通り、而して、再び心臟へ還流するもので、其過流するところの原動力は云ふまでも無く心臟に在る、即ち心臟が收縮、擴張し唧筒の作用を以て血液を左室より大動脈に向つて壓出し、而して全身を過流せしめるのである。

斯んなことは誰れでも知つて居ることであるが、尙今少し委しくこれを考へて見ると、

「心臟の收縮する力が血液を全身の動脈及び毛細管に輸り、更に其血を靜脈より心臟にまで還流せしめる程の强大なるものであらふか」、

と云ふ疑問が起らねばならぬ、而して實際又そんな强大な力を心臟は有するものでなく、從つて血液が全身に循環過流することも只心臟の力のみを以つてしては不可能のことであらねばならぬ、即ち大動脈の血壓が一五〇粍、普通動脈にては一一〇乃至一二〇粍、毛細管にては三〇乃至五〇粍、又靜脈にては只僅かに壓力を存するのみ、と云ふことに依つて考へても靜脈まで心臟の收縮力が充分に及ばざることは知らるゝのである。

殊に又左室より出づる大動脈が漸次分岐して無數の小動脈となり、遂には全身の毛細管となりて實に廣大なる流床をなし、然る後再びそれ等の毛細管が漸次集合して靜脈管となり更らに二大靜脈幹となりて心臟の右房に還流する、これだけの長い且い廣い面積の流床を通る抗抵に打ち勝つて血液を心臟まで循行せしめ得ることが、只左室の收縮力だけを以つて能き得ることは勿論不可能である、然らば心臟の擴張に依りて大靜脈から血液を吸び込むのであらふか、と云へで心房は菲薄にして素より其力は無い、只右室の擴張は間接に右房を通じて血を右房へ吸ひ込む作用は勿論ある、けれどもそれだけでは全身の毛細管に接

近する程の遠い且つ小さい靜脈の血液を心臟まで吸ひ込むことは尙不可能であらねばならぬ。

そうすると血液循環は心臟の力だけでは能きないことになる、從つて「心臟が喞筒の作用で全身に血液を週環循行せしめる」、と云ふことも能きないのである、只血液は壓の高い方から低い方へ向つて流れるのである、と云へば其理由は最も簡單で只一言にして足る良い說明であるが、それには血液の流れる方に血壓の低下を來たす原因が右室の擴張する外、尙それに要する力が無ければならぬ。其力は實に**呼吸運動**であつて、即ち吸氣の際胸內に陰壓を生じ、それで肺中に空氣が喉頭氣管から流れ込むと同時に又心臟へも靜脈から血液を吸ひ込むのである。

而して大靜脈の血液は右房に吸ひ込まれ、一般靜脈の血流は胸內の大靜脈の方に向つて完全に還流することが能きるのである、それ故に若し血液循環を極端に云つて見れば、**心臟の收縮に因りて血液を全身の血管に送り出し、呼吸運動(吸氣)に因りて全身の靜脈から血液を心臟に還流せしむるのである**、とも云ひ得るので、即ち心臟は血液循環の半分の作用をなし、殘りの半分は呼吸運動(吸氣)に因る胸內の陰壓に依つて能きるのである、即ち其後の半分の作用を心臟に對して一の臟と認めこれを**心包**と名けたのである。

呼吸運動は橫膈膜と胸部の筋、即ち內外肋間筋の收縮とに依りて起るもので、若し心包を解剖學上に牽强してこれを指示せんとすれば、**呼吸運動を營むもの、即ち橫膈膜と內外肋間筋**を指すと云はねばならぬ、併し素より心包は呼吸運動に因りて生ずる胸內の陰壓の作用を名付けて一の臟器と假定したるものなれば解剖學的に其部位を指定すべきものでない、又其部位を指定する必要も勿論ないのである。

難經には「心包は心の包絡なり」、と云つてあることも、牽强して考へる時は心

臓の存する胸腔の周圍、即ち胸廓、横膈膜を總稱したるものと解することも能きるのである、「心の包絡なり」と云ふ字義を直ちに輕卒に解して心嚢とするが如きは素より誤れるもので、それでは臓の意義を爲さゞるのみならず、手の三陰の一(厥陰)として數ふる意味もなくなるのである。

2、三　焦(腑)

呼吸と血液循環の原動力なる呼吸運動を一の臓と假定してこれを心包と爲したることは已に述べた通りであるが、其呼吸運動の外に尙人の生活機能に重要なる原動力となるものがある、それは蠕動運動であつて其機能を亦一の腑と假定してこれを三焦と云ふ。

腸の蠕動運動は種々重要なる生理的作用をなすもので、それを擧げて見れば

一、腸の吸收作用を助く

腸の吸收作用は營養の本源で生活上最も主要なる機能である、其腸の吸收作用を助けるものは實に腸の蠕動運動にあるもので、語を換へて云へば蠕動は吸收機能を喚起する基因とも云ひ得るのである、即ち營養素其他のものが腸粘液膜上皮の間隙より乳糜管に吸收さるゝことは皆腸壁に存する筋纖維の收縮に因りて起る組織間の陰壓に基因し、又は其助けに因るものである、而して又腸の毛細血管壁を通過して血中に滲入する吸收作用に在つても亦其蠕動の助けが關與するのである。

夫れ故此蠕動運動を三焦とすれば、三焦は或は單に吸收機關とし、又營養機關の本源とも認め得るのである。

一、腸の靜脈の血行を促進す。

腸の靜脈は他の靜脈と異にして腸より起る毛細管は集合して門靜脈となり其門靜脈は肝臓に入りて後再び復たこゝに毛細管となる、即ち其血液は肝

臓の毛細管を經て肝靜脈となり初めて下大靜脈に入るのである、それ故門靜脈に於ては、靜脈の還流を掌るところの心包の力が此門靜脈には透達することは勿論能きない、即ち門靜脈の血行は只僅かに毛細管内の僅少なる壓力を以つて流れねばならぬことになる、それ故其循行を完全ならしむるには他の助けを要するのである、殊に門靜脈血は一般の靜脈血と異り腸より吸收したる營養素を肝臓まで運搬する重要なる任務を有するものなれば特に其血行は最も完全ならざるべからざるものである、若し其血行が減弱するか、或は障碍さるゝときは腸の吸收機能も障碍し、又内臓神經機能の異狀をも來たし、從つて營養機能をも妨ぐるのである。

此門靜脈の血行を助けるものは實に腸の蠕動運動であつて、即ち腸壁の筋纖維の收縮することに依つて毛細管及び其小靜脈の血行を促進することは丁度歩行運動に依つて下肢の靜脈血行を助くるが如き用をなすのである。

それ故に三焦は尙門靜脈系の血液循行機關とも認めらるゝのである。

一、内臓の末梢神經を刺戟して總べての内臓の機能を促進せしむ。

蠕動運動は内臓神經、即ち交感神經と迷走神經の末梢に適度の刺戟を與へ而して總べての内臓及び諸腺等の機能を常に促進するもので、それ故若し腸の蠕動が減ずる時は亦總べての臓器の機能が減弱し全身に異常を來たすのである、例へば初生兒の生力弱きもの、哺乳不充分なるもの等が適度に下劑を與へて腸の蠕動を整へる時は、直ちに元氣を恢復する、加之尙發熱せるものさへも、腸の蠕動を亢めるとそれに依つて又能く解熱するものである、又漢方醫學に於ては大人にも熱性諸病に解熱法として或藥物を以つて通利をつけることを用ひたもので、其解熱の成績は只一に其通利の程度を適宜にすること、即ち腸の蠕動を適宜に亢奮するといふことに在る、等の如し。

此外尙腸の蠕動運動は食物の消化を助け、又食物の殘渣を排泄するため、直腸

の方へ下送する用をなす等の作用あることは云ふまでもない。

それ故に蠕動運動は實に生活機能の重要なる原動力となるもので、三焦は又內臟神經を刺戟して內臟の機能を促進する機關とも認めらるゝのである。三焦といふ名稱は上焦、中焦、下焦の三部を總稱したるものにして、上焦は上脘、中焦は中脘、下焦は陰交の部に相當し、若しこれを解剖學上に强て當て嵌めて見れば內臟動脈軸の分佈領域の腸に於ける上記の機能を上焦とし、上腸間膜動脈の分佈領域、即ち空腸、廻腸の一部に屬する部に於ける上記の機能を中焦とし、下腸間膜動脈の分佈領域、即ち廻腸の一部と大腸に於ける上記の機能を下焦とする、と丁度三焦の名に適するのである。併し三焦も素より機能を本体とするもので勿論器質に當て嵌むるべきものではない、それ故に强いて解剖的部位を定めるには及ばないのである。

難經に、「三焦は水穀の通路にして氣の終始する處なり」、といふ、これも字の通

り解釋すれば**只腸を指す**ことになるのであるが、矢張りこれも此言葉に牽强して見れば、**營養の通行、吸收機能の本源、生活原動力の起因**といふことに考へれば考へられないでもないのである。

三焦と**心包**とは斯くの如く身體に起こる一種の運動を以て一の臟と腑に假定せるもので、實体は無いが其機能は確實に存在し、實に生活上重要なるものであつて、即ち人體の生活機を喚起する原動力とも做すべきものである、此意味に於て古人が此生理的の機能を認めて以て特に無形の一臟、一腑、即ち心包と三焦とを設け、これを有形の臟、腑に加へて六臟六腑となしたることは實に大膽にして且周到なる考へである。

第二章　臟腑と四肢の關係

六臟六腑はこれを上肢と下肢に配屬するもので、此の內三臟三腑は手に、他の三臟三腑は足に屬するものとす、即ち肺、心、心包の三臟と、大腸、小腸、三焦の三腑は手に屬し、脾、肝、腎の三臟と、胃、膀胱、膽の三腑は足に屬するものとなす。

其他骨盤內の臟器、即ち生殖器は臟腑何れにも屬せず、又從つて手足に關係せざるものとす。

	手	足
臟	肺、心、心包	脾、肝、腎
腑	大腸、小腸、三焦	胃、膀胱、膽

臟と腑を上肢及び下肢に配屬する理由に就ては後に述べる項に於て自ら了解せらるゝのであるが、これを一言すれば臟と腑を根底として生ずる經絡があつて其經絡が上肢と下肢に循行するからである。

但し「經絡が臟腑を根底とする」と云ふも上下肢の各六經が皆臟腑から發生するのではなく、或るものは臟腑より發して手足に至り、或るものは上下肢より起りて臟腑に循るのである。

第三章　經絡

經絡は陰陽の衛氣が身体に循行する經脉にして其根底を臟腑に存し、而して其各經が上肢、或は下肢に循るのである。

經絡は六臟六腑に屬するもの十二經と骨盤内臟器に屬するもの二經あり、合してこれを十四經と稱す。

但し六臟六腑に屬するものは皆身体の左右に存して有對であり、骨盤内臟器に屬するものは身体の正中を循りて無對である。

有對十二經の名稱を擧ぐる時は左の如し。

肺經
大腸經
胃經
脾經
心經
小腸經
膀胱經
腎經
心包經
三焦經
膽經
肝經

此十二對の經は、これを其循行に從つて上肢及び下肢に配屬せしめ、左の如く

分類す。

	手	足
臟	肺經	脾經
	心經	肝經
	心包經	腎經
腑	大腸經	胃經
	小腸經	膀胱經
	三焦經	膽經

即ち肺、心、心包の三臟の經は各臟に起りて手指に終る。

大腸、小腸、三焦の三腑の經は手指に起り各腑に屬し頭首に終る。

胃、膀胱、膽の三腑の經は頭首に起り各腑に屬して足趾に終る。

脾、肝、腎の三臟の經は足趾に起りて腹部の臟に終る。

此外、骨盤內臟器(生殖器)を根底として發する無對の二經は身體前後の正中線に存し、之を任脉、督脉と云ふ、即ち有對の十二經を左右合して二十四經、これに無對の二經を加へて全身總數二十六經を有するものとす。

又更らに帶脉と稱する一系の經が腹部に於て軀幹を横に一週するものがある。

猶又骨盤より起る衝脉の一系と、足より起る陰蹻脉、陽蹻脉、陰維脉、陽維脉の四系とが頭部に循り、各其經路が前記の十四經に交通するものがある。

此特別なる六經は、任脉及び督脉の二經と共にこれを奇經と稱し、其數八經あるを以てこれを奇經八脉と稱す、而してこれを前記の本經絡十二經に合する時は經絡の總數は二十經を有することになり、全身にて左右合算するときは三十七經となる。

第四章　臓腑と陰陽の關係

臓は總べて陰に属し、腑は總べて陽に属するもので、即ち肺、心、心包、脾、肝、腎の六臓は陰に、大腸、小腸、三焦、胃、膀胱、膽の六腑は陽に属す、而して其臓腑より起る經は亦陰陽の關係も臓腑と同じとす。

此陰の六臓を更に三陰に分つときは、肺、脾を大陰とし、心、腎を少陰とし、心包、肝を厥陰とす。

陽の六腑は小腸、膀胱を太陽とし、三焦、膽を少陽とし、大腸、胃を陽明とす。

今手、足に属する臓及び腑と三陰三陽との關係を表に依つて現はすときは左の如し。

	手	足
腑 少陽	三焦	膽
腑 陽明	大腸	胃
腑 太陽	小腸	膀胱
臓 少陰	心	腎
臓 厥陰	心包	肝
臓 太陰	肺	脾

此外、督脉は陽に属し、任脉は陰に属す。

第五章　陰陽循環の順路

手の太陰肺經
手の陽明大腸經
足の陽明胃經
足の太陰脾經
手の少陰心經
手の太陽小腸經
足の太陽膀胱經
足の少陰腎經
手の厥陰心包經
手の少陽三焦經
足の少陽膽經
足の厥陰肝經

經絡は以上の順次を以つて肺經より起始して肝經に至り更らに又肝經より肺經へ還へるものにして氣血が此十二經を以つて常に全身を循環することは恰かも血液循環と同じようなものである。

此十二經の外任脉及び督脉の二經は骨盤内より發し身體正中線を循行するものにして、即ち任脉は軀幹前面の正中線を上り、督脉は背部正中線を上りて後頭部に至り頭部矢狀線を經過して顏面正中線を下り上口唇の邊に於て任脉と會合す、而して其經路中に於て十二系の經絡と交通するのである。

第六章　全身の經絡

I、各經絡循行の經路

第一、手太陰肺經

肝經の交流を受けて中焦(任脉經の中脘)より起り、天樞の部に下りて大腸を絡ひ胃の兩側より肺に屬し、更らに前腋窩線の第一肋骨上部(雲門)に至り、上膊內側を下り肘關節下部より前膊外側の前面を經て拇指爪甲角の橈骨側(少商)に終る。

一支絡は前膊前面の橈骨側にて上三分の一(孔最)の部より分れて背面に出で示指の拇指側爪甲角(商陽)に至て大腸經と交流す。

第二、手陽明大腸經

示指爪甲角の拇指側(商陽)より前經の交流を受けて起り拇指と示指との間より前膊後側の橈骨側を經て上膊の外側を上行し、肩峰突起の前緣を經て第七頸椎の上際即ち大椎に於て督脉經に會合し、更らに頸部の前側を下行して鎖骨上緣の中央(缺盆)より胸內に入り肺を絡ひ腹部に下行し天樞の部に於て大腸に屬す。

其一支絡は缺盆より分れて上行し下頸部を經て上口唇に至り左右交叉して小鼻翼の外下緣(迎香)に至りて胃經に交流す。

第三、足陽明胃經

小鼻翼の外下緣(迎香)より前經の交流を受けて起り上行して內眦(晴明)に至り、夫れより下行し口角を經て頤部に至り左右交叉して下顎隅の

前(大迎)に至る、此處より分岐したる一枝は耳の前緣より髮際を漸次上行し前頭部正中線上にて前髮際を入ること五分(神庭)の點にて督脉經に會合す。

本經は大迎より分れて下行し鎖骨上際の中央(缺盆)より胸內を經て腹部に至り、上脘、中脘の邊に於て胃に屬し脾を絡ふ。但し左右の二經ともに等しく胃に循るのである。

其一支絡は缺盆より分れて直下し鼠蹊溝の中央(氣衝)に入る。

又一支絡は胃の下口より腹腔の深部を下行して氣衝に至り前支絡と合す、それより大腿の外側を三里に至り下腿を經て足背の內側より爵趾と次趾の間より次趾の小趾側なる厲兌に至る。

又一支絡は三里より分れて前支絡の外後側を下行し、第二蹠骨の外方に至りて前の厲兌に至るものと合す。

第四、足太陰脾經

又一支絡は足背の稍中央なる衝陽より分れて爵趾根部の內側を足蹠より爵趾爪角の脛骨側(隱白)に至り脾經に交流す。

爵趾爪角の脛骨側なる隱白より前經の交流を受けて起り足蹠を廻りて足の內側より內踝の前側を上行し膝蓋部より大腿內側を通り鼠蹊部に至りて腹に入り臍の傍ら三寸五分(大橫)を經て腹部正中線の中脘に至り、それより大橫の上方三寸の點(腹哀)に至りて分岐し左側のものは脾に屬し胃を絡ふ、但し右側のものは支絡を以て脾を絡ふ。

而して其經は腹哀より胸內に上行し前腋窩線を第三肋間の周營に至り、下行して第六肋間なる太包に至り再び上行して第二肋骨の肩胛關節に接近したる部(中府)より頸部を經て舌根に散ず。

又其支絡は腹哀より上行して胸內に入り、心臟に注ぎ心經に交流す。

第五、手少陰心經

前經の交流を受けて心臟より起り下行して臍上二寸の點(下脘)に至り小腸を絡ふ、但し二經を發して左右に循行するものとす。

其支絡は心臟より發して肺を絡ひ腋窩に出で上膊及び前膊內側より前方に出で手掌の少府を經て下行し小指端の橈骨側なる少衝に至りて小腸經に交流す。

第六、手太陽小腸經

小指端の橈骨側なる少衝より前經の交流を受けて同指尺骨側の爪甲角なる少澤より起り、手背內側より前膊後面の尺骨側及び上膊の後側を上行して肩峰突起の後緣に至り肩胛骨の後側を斜めに大椎に至りて督脉經に會合し左右交叉して肩上を越へ鎖骨中央の上緣(缺盆)を經て胸內に入り心臟を絡ひ胃に下り小腸に屬す。

其支絡は缺盆より分れて上行し顴骨弓の下緣、咬筋の前緣なる顴髎に至り、それより外眦(睛明)を經て耳內に入り聽宮に終る。

又其一支絡は顴髎より分れて眼下を內眦(睛明)に至り膀胱經に交流す。

第七、足太陽膀胱經

內眦(睛明)より前經の交流を受れて起り、眉毛の內端(攢竹)を經て頭部矢狀線にて髮際を入る五分の點(神庭)に於て督脉經と會合し、再び分れて副矢狀線(正中線の側方二寸)を上り百會(矢狀線上にて兩耳孔を連接する線と交叉する點)にて左右合し、又督脉經より分れて副矢狀線を後頭部に下り、大椎(第六頸椎と第七頸椎の間)、陶道(第七頸椎棘狀突起の下際)を過ぎて、背部正中線の側ら一寸五分を下りて腎兪(第一腰椎の側方一寸五分)に至りて膀胱に屬す。

腎を絡ひ、膀胱兪(第二薦骨椎の側方一寸五分)に至りて膀胱に屬す。

一支絡は百會と會合する處より分れて耳の上部に至り分散す。

又一支絡は腎に屬する處より分れて骨盤内に入り尾閭骨端の側方五分(會陽)を經て大腿後側を下行して膝腘窩の中央(委中)に入る。

又一支絡は天柱(後頭結節の下方後髪際より上方五分なる瘂門の傍ら二寸)より分れて背部正中線の側方三寸を下り、更らに大腿後面に至りて前支絡の外側を通り膝腘窩の委中に於て前の委中に入るものと合す。

此二支絡の合したるものは下腿の後側を下行し外踝の下部を經て小趾端の外側なる至陰に至り腎經に交流す。

第八、足少陰腎經

小趾の外端至陰より前經の交流を受けて起り足蹠の中央(湧泉)を廻りて内踝の後側に至り、それより下腿及び大腿の内側後方を上行して臀部に至り尾閭骨端(長强)に於て督脉經に會合す、再び分れて更に前方に出で鼠蹊部より腹部正中線の傍ら五分の部位を上行し肝を貫きて胸内に入り、頸部前側を經て甲狀軟骨の上緣に至り正中線(廉泉)に終る。

其一支絡は臍の傍ら五分(盲兪)より分れて腎に屬し、更らに下りて腹部正中線にて臍下三寸の點(關元)にて任脉經を過ぎて膀胱を絡ふ。

又一支絡は副胸骨線の第二肋間(神藏)の點より分れて心臟に注ぎ、胸骨體の正中(膻中)に至りて心包經に交流す。

第九、手厥陰心包經

胸骨體の中央(膻中)より前經の交流を受けて起り直ちに心包に屬し腹に入り、上脘、中脘、陰交に於て三焦經に屬す。

其支絡は心包に屬するところより分れて乳嘴突起の外側(一寸)なる天池に至り、腋窩を經て上膊内側を下行し肘窩の正中(曲澤)より前膊の前面を下り手掌の中央(勞宮)を經て中指拇指側爪甲角(中衝)に終る。

又一支絡は勞宮より分れて環指の小指側爪甲角(關衝)に至て三焦經に交

流す。

第十、手少陽三焦經

環指爪甲角の小指側(關衝)より前經の交流を受けて起り前膊後側の中央を上行して上膊後側より肩峰突起の後緣を經て肩の最も高きところ(肩井)に出で鎖骨中央の上緣(缺盆)に入り胸骨正中の中央(膻中)に於て任脉經に會合す、夫れより心包を絡ひ下行して上脘(腹部正中線にて臍上五寸)に至り上焦に屬し、中脘(腹部正中線にて臍上四寸)に至り中焦に屬し、陰交(腹部正中線にて臍下一寸)に至りて下焦に屬す。

其支絡は膻中より上行して缺盆に出で督脉經の大椎に會合し、耳後より耳上に廻りて前額に出で眉毛の中央より上方一寸(陽白)を經て內眦(晴明)に至り顴骨弓の下緣を過ぎりて咬筋の前緣なる頰髎に來り小腸經に會合す。

又一支絡は耳翼下端の後方なる翳風より分れて耳內に入り外眦(瞳子髎)に至りて膽經に交流す。

第十一、足少陽膽經

外眦(瞳子髎)より前經の交流を受けて起り前頭髮際を耳上より耳後に至り乳嘴突起の下端を經て再び耳後を上行し耳上より眉毛の中央より上方一寸(陽白)の點を經て膀胱經の晴明(內眦)に會合す。夫れより更らに上行して顳顬線(改正孔穴の第二側線)を後頭部に至り項部正中線の側方二寸を下り耳垂の高さにて髮際(風池)を過り大椎に至り左右交叉し、前下方に出でゝ肩上(肩井)を越へ鎖骨上緣の中央(缺盆)に入る。

一支絡は風池より分れて耳下より前方に至り外眦(瞳子髎)に入る。

又一支絡は外眦(瞳子髎)より分れて下行し側頸部を經て缺盆に至り前の缺盆に至るものと合す。

此相合したるものは胸内に入り乳線の通り季肋の邊(期門)に於て右側のものは肝を絡ひ日月(期門の下五分)の邊に於て膽に屬す、而して其支絡は蹊溝の中央(氣衝)を過ぎり股關節の前緣(環跳)に入る、但し左側のものは支絡を以て膽及び肝を絡ふ。

又一支絡は缺盆より直下して環跳に至り前支絡と合し、大腿の外側及び下腿の腓骨側を下行して外踝の前緣を通り足背を經て第四趾の小趾側爪甲角(竅陰)に至り終る。

又一支絡は足背にて第四趾の後方(臨泣)より分れて蹠趾爪角の腓骨側(大敦)に至り肝經に交流す。

第十二、足厥陰肝經

蹠趾端の腓骨側なる大敦より前經の交流を受けて起り足背の內緣より內踝の前を通り下腿及び大腿の內側を上行し陰阜より骨盤內に入り左右交叉し陰部を繞りて任脉經に會合す、夫れより分れ再び關元(腹部正中線にて臍下三寸)にて任脉經に會合し更らに分れて斜めに乳線の季肋部(期門)に至り右側のものは肝に屬し膽を絡ふ、但し左側のものは支經を以つて膽及び肝に絡る。

其支絡は章門(第十一肋骨尖端の少しく內下方)より分れて胸部及び頸部を上行し內眦の內方より前額に至り頭蓋の頂上(百會)にて督脉經に會合す。

又一支絡は內眦部より別れて鼻側を下行し上口唇に至りて左右相合す。

又一支絡は肝に屬するところより分れて肺に注ぐ。

又其一支絡は下行して胃に至り中脘(臍上四寸)の邊に至りて肺經の起始に交流す。

第十三、督脉經

骨盤內(生殖器)より發し、婦人は陰唇の上端、男子は陰莖の正中より會

陰を經て尾閭骨端（長强）に出で、背部正中線を上行し第三椎（身柱）に至りて左右に分れ各第二椎の側方一寸五分（風門）に於て膀胱經に會合し、更らに第一椎の下際（陶道）にて再び左右相合し正中線を上行して頭部に至り矢狀線を後頭より前頭部に進み鼻尖を經て顏面正中線を下り上口唇人中溝の下端（兌端）より口唇の內面に入り上唇繫帶の上唇に附着する部（斷交）に於て任脉經に會合す。

第十四、任脉經

前經と共に骨盤內（生殖器）より發し陰部を繞りて腹部及び胸部正中線を上行し、頤部より頤唇溝の中央（承漿）に至りて左右に分れ、口角を繞り斷交に至り督脉經と會合す。

其支絡は承漿より分れて下眼瞼中央の下部に至り承泣（下眼瞼の中央より下方七分許り）に於て胃經に交流す。

I、經絡循行の順路

十二經は肺經より順次各系統を交流し肝經に致り再び肺經に交流して全經を一循することは前に述べた通りであるが、**此一循行は十二經を一循する**と云ふことであつて、十二經の一循環が**全身の一循となる**と云ふ意味ではない。

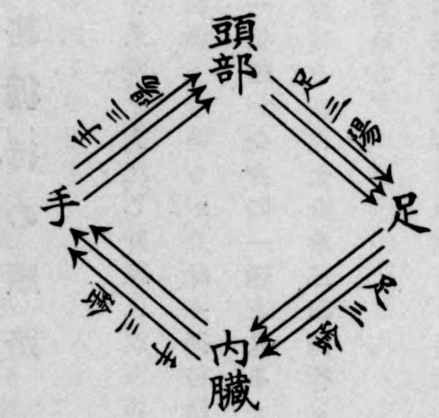
即ち十二經の一系が一循するには**全身を三回循行**（往復）してそれで始めて**十二經の一系が一循さるゝ**のである。

其循行は手の三陰の經は胸部の臟より起りて手指に至り、手の三陽の經は手指より起り各所屬の腑に循りて頭部に至る。

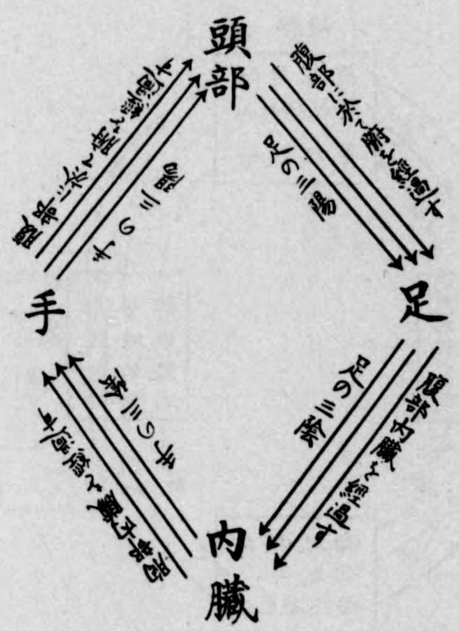
足の三陽の經は頭部より起り各所屬の腑に循りて足に至り、足の三陰の經は足趾より起りて胸腹部の臟に至る。

而して足の三陰即ち腹部臓の三經は、復た手の三陰即ち胸部臓の三經に聯絡するものである。

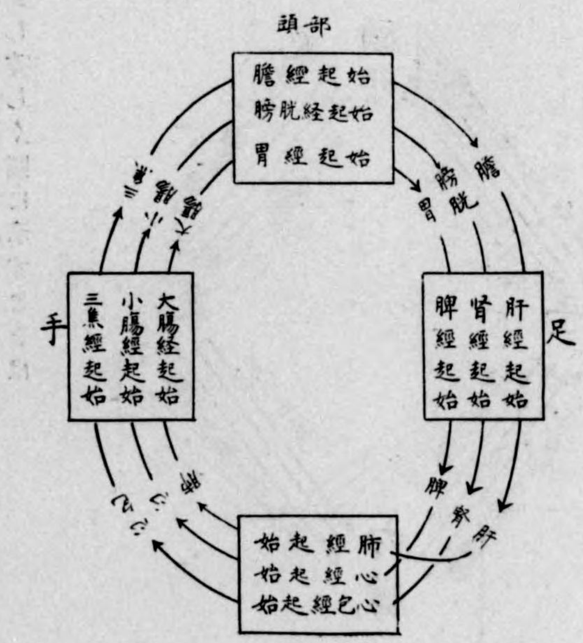
其經路を圖に示すときは



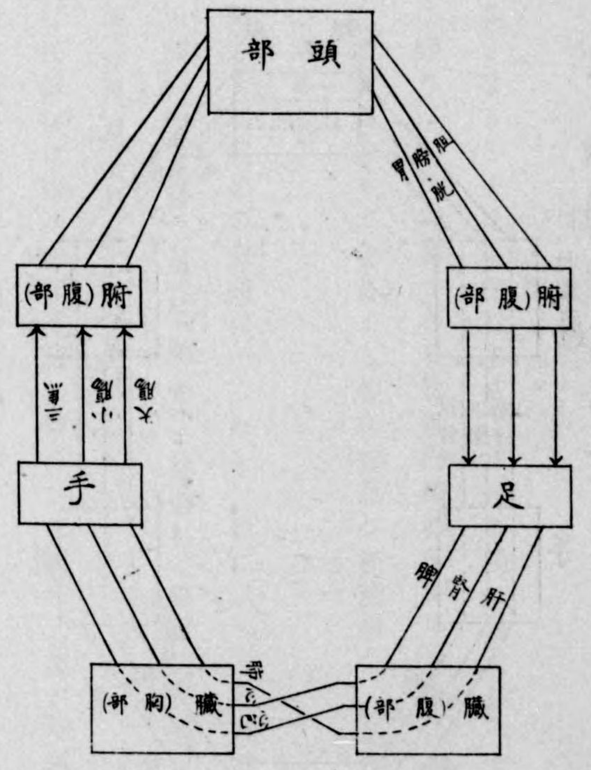
尚これを今少し委しく圖に示すときは



更らに委しく臓腑の關係を圖に示すときは左の如し。

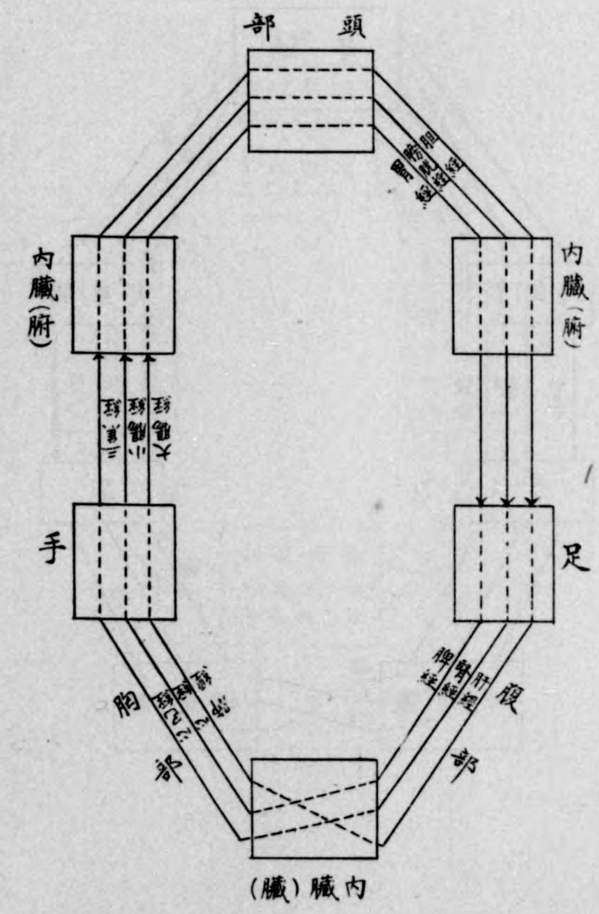


此循行に於ける胸腹部の關係を示すときは



注意　腑は胸部になく、皆腹部に在り。

此循行を更らに臓腑の關係に於て示すときは



Ⅱ、經絡相互の交通

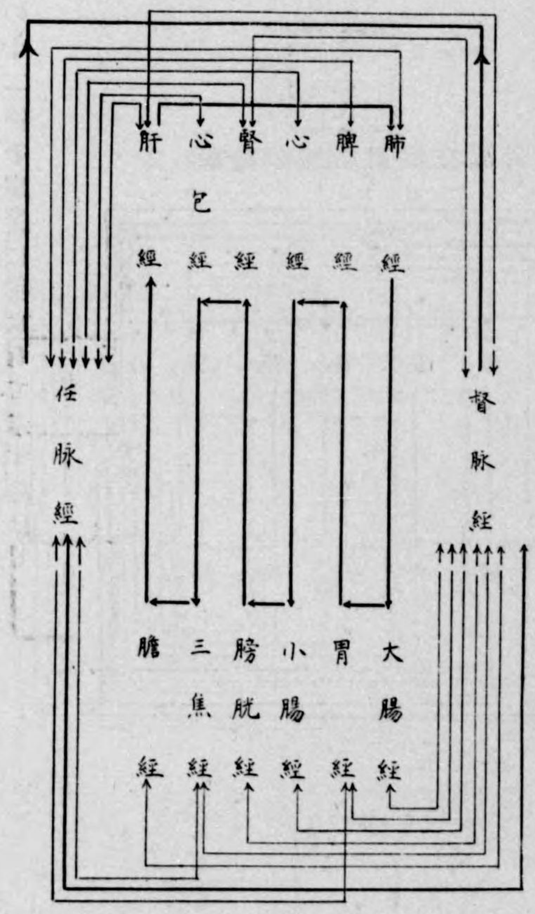
十二經が一系となりて全身を循行することは前項に於て述べた通りである、而して尙其他に臓及び腑には屬せざる骨盤内臓器(内生殖器)より發して體の前後正中線を上行し頭首に至りて會合する督脉經及び任脉經の二系がありて各十二經と交通するのである。

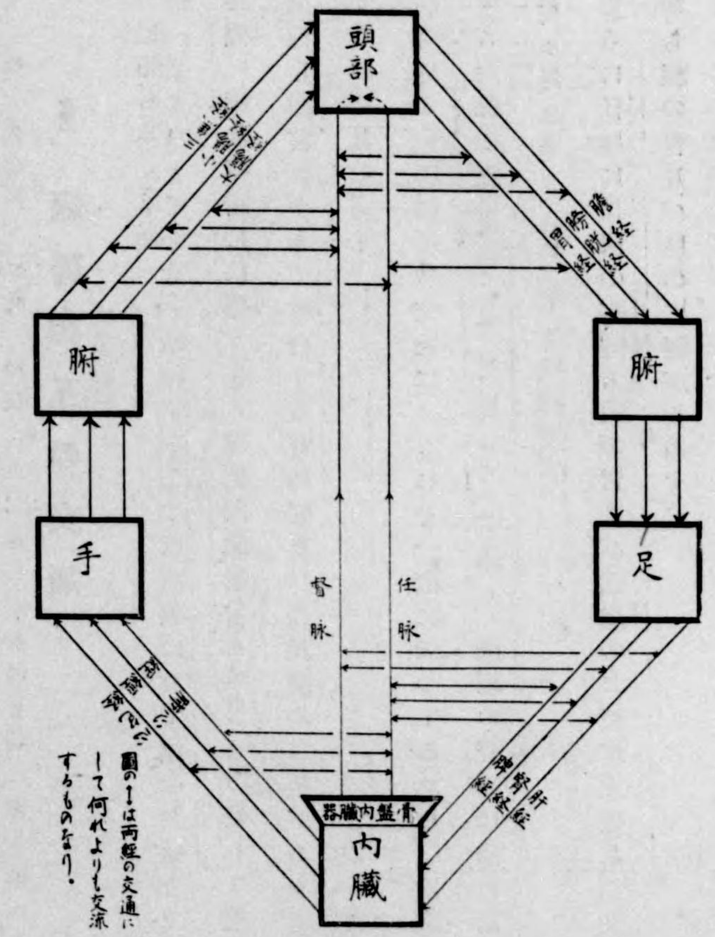
任脉及び督脉と十二經との交通は、これを一概に云つてみれば、陰經の任脉は陰に屬する六臓の經(肺、心、心包、脾、肝、腎)と交通し、陽經の督脉は陽に屬する六腑の經(大腸、小腸、三焦、胃、膀胱、膽)と交通す。

而して更らに任脉には陽の經即ち腑の胃及び三焦の二經が交通し、又督脉には陰の經即ち臓の腎及び肝の二經が交通す。

更らに十二經の循環及び任脉、督脉と十二經との交通を圖に書き換へてこれを示す時は

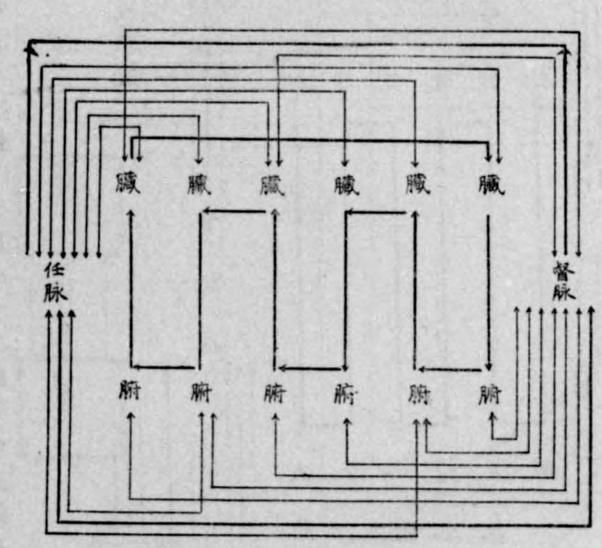
十四經絡周環交流圖





又前圖の十二經を臟腑に現はして示す時は

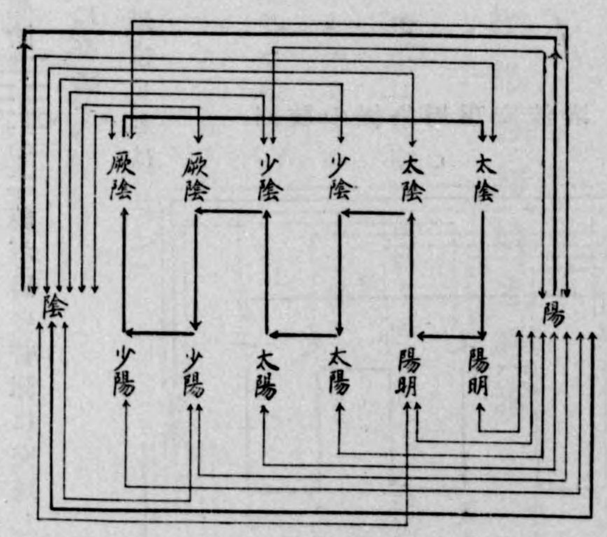
臟腑の經絡周環交流表



陰の二經即ち二臟が陽の督脉に、陽の二經即ち二腑が陰の任脉に交通す。

更らに臟腑を三陰三陽に書き換へて示す時は

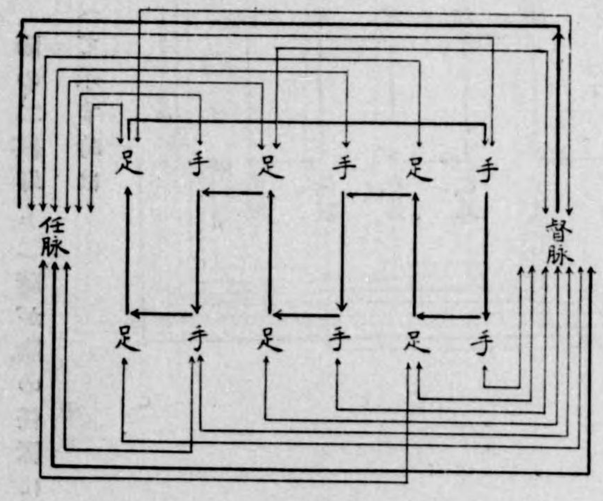
三陰三陽周環交流表



即ち少陰☷と厥陰☳の二經が陽の督脉に交通し、陽明☲と少陽☱の二經が陰の任脉に交通す。

これを四肢の關係に示すときは

四肢の經絡周環交流表



即ち足の二陰の經が陽の督脉に交通し、足の一陽及び手の一陽の經が陰の任脉に交通す。

Ⅲ、經絡の起始と終末

有對の十二經は皆手指或は足趾に起始するもので、其内足趾或は手指に終るものと、手指、足趾より起るものとの二種がある。

一、手指、足趾に起るもの

い、手指に起るもの（三腑の經）

大腸經が示指より起る。

小腸經が小指より起る。

三焦經が環指より起る。

ろ、足趾に起るもの（三臓の經）

脾經が蹠趾に起る。

腎經が小趾に起る。

肝經が蹠趾に起る。

二、手指、足趾に終るもの

い、手指に終るもの（三臓の經）

肺經が拇指に終る。

心經が小指に終る。

心包經が中指に終る。

ろ、足趾に終るもの（三腑の經）

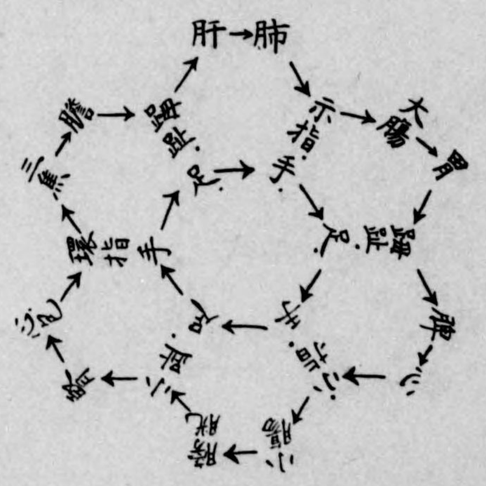
胃經が次趾に終る。

膀胱經が小趾に終る。

膽經が第四趾に終る。

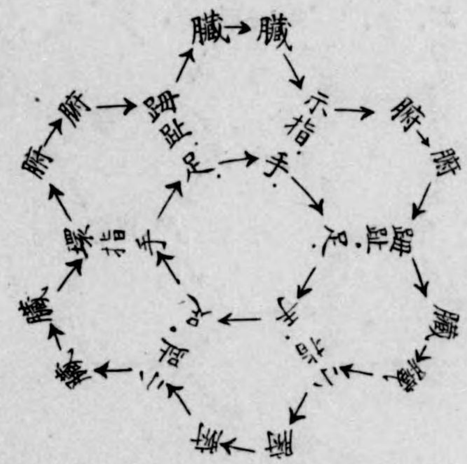
これを圖に示すときは

内臓と手指足趾の関係圖



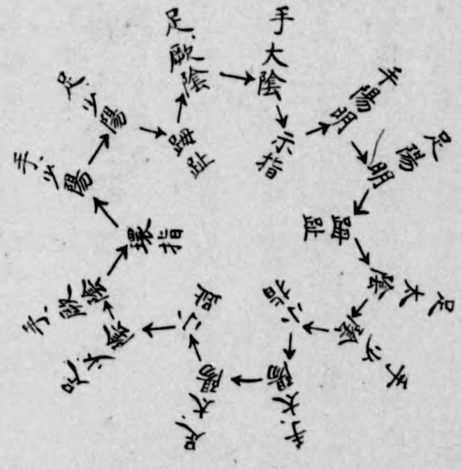
又これを更らに臓と腑を明らかに示すときは

手指足趾と臓腑の関係



又陰陽との關係を示すときは

陰陽と手指足趾の関係圖



手指より起る三腑の經は皆頭首に終る。

一、大腸經が小鼻翼の外下緣（迎香）に終る。

一、小腸經が内眦（睛明）に終る。

一、三焦經が外眦（瞳子髎）に終る。

足趾に終る三腑の經は皆頭首に起る。

一、胃經が小鼻翼の外下緣（迎香）より起る。

一、膀胱經が內眦（睛明）より起る。

一、膽經が外眦（瞳子髎）より起る。

又手指に終る三臟の經は內臟より起る。

一、肺經は中焦に起る。

一、心經は心より起る。

一、心包經は心包より起る。

足趾に起る三臟の經は內臟に終る。

一、脾經は胸內に至る。

一、腎經は胸內に至る。

一、肝經は胸內に至る。

但し胸內に入るものは手の三臟の經に交流し而して更に所屬の臟器に連るものとす。

尙頭首に終るもの、任脉經は上口唇裏面の中央に在る上唇繫帶の前に終る。

但し任脉經は骨盤內臟器（內生殖器）より起始し、軀幹前面正中を上行するもの。

督脉經は上口唇裏面の中央に在る上唇繫帶の前に至り任脉經と交流す。

但し督脉經は骨盤內臟器より起始し、軀幹背面正中を上行して顏面正中線を下行す。

V、十四經と臟腑の關係

十二經が皆臟腑に根底を有することは已に述べた通りであるが、併し其各經の本經が皆臟腑を根底として、夫れから發生して居るものではなく、中には本經より支絡を出して臟腑と聯絡あるものもある、但し其本經と稱するものは實は十二經が順次に聯絡して體を循行する經路の一系を云ふものであつて、其支絡

と稱するものが必ずしも其經の枝絡或は傍系とは定め難いのである、今茲に再び各經が臟腑と聯絡する狀況を述べて見る。

1、各經絡と臟腑との聯絡

一、肺　經

肺經は肝經より交流して腹部より起始し胸部に入りて肺に屬す、而して其經は更らに上肢に循り手指に於て大腸經に交流す。

一、大　腸　經

大腸經は肺經より交流して手指より起り胸內に入り肺を絡ひ更らに腹部に下りて大腸に屬す。

而して一支絡あり、胸內に入る前即ち鎖骨中央の上緣(缺盆)より起りて上行し顏面に於て胃經と交流す。

此經の本經は胸內に入り大腸に屬するものを云はねばならぬのであるが、通常顏面に至り胃經に交流する支絡を以て本經と稱す。

以下の諸經は皆斯くの如し。

一、胃　經

胃經は大腸經より顏面に於て交流し、下行して腹部に至り脾を絡ひ胃に屬す。

而して一支絡は鎖骨上緣の中央(缺盆)より分岐して下肢に循行し脾經に交流す。

一、脾　經

脾經は、足趾より胃經の交流を受けて起始し下腿及び大腿を經て上腹部に至り胃を絡ひ左側のものは脾に屬し、右側のものは支絡を以つて脾に至る、而して一支絡胸內に入り心臟に注ぐ。

一、心　經

心經は心臟より脾經の交流を受けて起始し腹部に下りて小腸を絡ふ、而して一支絡は心臟より發して手指に至り小腸經に交流す。

一、小　腸　經

小腸經は手指より心經の交流を受けて起始し前膊及び上膊を上行して胸內に入り心臟を絡ひ腹部に下りて小腸に屬す。而して一支絡は鎖骨中央の上緣(缺盆)より分岐して顏面に至り膀胱經に交流す。

一、膀　胱　經

膀胱經は顏面より小腸經の交流を受けて起始し頭部を廻りて背部を下り腎を絡ひ第二薦骨椎の邊より膀胱に屬す、而して一支絡は後頭部より分岐して背部及び下肢を下行し足趾に至りて腎經に交流す。

一、腎　經

腎經は足趾より膀胱經の交流を受けて起始し下肢を上行して腹部に入り腎に屬し膀胱を絡ふ、而して一支絡は臍の傍より分岐して上行し肝を貫きて胸內に入り肺を絡ひ上行して前頸部に終る。

一、心　包　經

心包經は胸部胸骨體の中央(膻中)の邊より腎經の交流を受けて起始し直ちに心包に屬し腹部に至りて上脘、中脘、陰交に於て三焦を絡ふ、而して一支絡は心包に屬するところより分岐して頸部を經て上肢を下り手指に至りて三焦經に交流す。

一、三　焦　經

三焦經は手指より心包經の交流を受けて起始し前膊及び上膊を上行して肩胛部を廻り胸部に入り心包を絡ひ下行して上脘、中脘、陰交に於て三焦に屬す、而して一支絡は胸部より分岐して顏面に至り膽經に交流す。

一、膽　經

膽經は顏面より三焦經の交流を受けて起始し頭部を經て胸內に入り腹部に下り季肋の邊に於て右側のものは膽を絡ひ肝に屬す、而して左側のものは枝別を以つて膽を絡ひ肝に屬す、一支絡ば鎖骨中央の上緣(缺盆)より分岐して胸腹部を下り下肢を經て足趾に至り肝經に交流す。

一、肝　經

肝經は足趾より膽經の交流を受けて起始し下腿及び大腿を上行して腹部に入り右側のものは肝に屬し膽を絡ふ、而して左側のものは枝別を以つて膽及び肝に聯る、一支絡は肝に屬するところより分れて肺に循る、又一支絡は下行して胃に至り中脘の邊に於て肺經に交流す。

一、任　脉　經

任脉經は骨盤內臟器(內生殖器)より發し軀幹の前面を經て顏面に至り督脉經と會合す。

一、督　脉　經

督脉經は骨盤內臟器(內生殖器)より發し軀幹の背側及び頭部矢狀線を經て顏面に至り任脉經に會合す。

2、經絡と關聯する臟器

各經絡が臟器及び其他の部位に關聯するものを示すときは左の如し。

一、肺　經

肝、大腸、咽喉。

一、大腸經

肺、胃、上口唇、鼻。

一、胃　經

小腸、大腸、胃、食道、脾、下口唇。

一、**脾　經**

胃、心、乳腺及び其他の諸腺、舌。

一、**心　經**

脾、小腸、肺。

一、**膀胱經**

小腸、腎、副腎、內生殖器、腦、脊髓、交感神經系。

一、**腎　經**

膀胱、心包、喉頭、氣管、甲狀腺。

一、**心包經**

腎、三焦、心。

一、**三焦經**

心包、膽、小腸、耳、眼瞼。

一、**膽　經**

三焦、膽、腦、耳、目、舌。

一、**肝　經**

膽、肺、腦、目、生殖器。

一、**任脉經**

迷走神經系、舌、

一、**督脉經**

腦、脊髓、交感神經系、舌。

Ⅵ. 身體各部に於ける經絡

一、上肢に循行する經絡

肺、心、心包の三臟の經と、大腸、小腸、三焦の三腑の經、即ち三陰三陽の經にして之を圖に示すときは

上肢	
手ノ臟	手ノ腑
肺經（太陰）	大腸經（陽明）
心經（少陰）	小腸經（太陽）
心包經（厥陰）	三焦經（少陽）

一、下肢に循行する經絡

脾、腎、肝の三臟の經と、胃、膀胱、膽の三腑の經、即ち三陰三陽の經にして、之を圖に示すときは

下肢	
足ノ臟	足ノ腑
脾經（太陰）	胃經（陽明）
腎經（少陰）	膀胱經（太陽）
肝經（厥陰）	膽經（少陽）

一、頭部に循行する經絡

胃、膀胱、膽、小腸、三焦の五腑の經と、督脉の經即ち六陽の經にして之を圖に示すときは

頭部	
手ノ腑	
小腸經（太陽）	胃經（陽明）
三焦經（少陽）	膀胱經（太陽）
	膽經（少陽）
督脉經（陽）	

此外肝經が百會迄に達す。

一、顏面に循行する經絡

胃、膀胱、膽、大腸、小腸、三焦の六腑の經と、督脉及び任脉の經即ち七陽一陰の經にして、之を圖に示すときは

顏面			
手ノ腑	足ノ腑		
大腸經（陽明）	胃經（陽明）		
小腸經（太陽）	膀胱經（太陽）		
三焦經（少陽）	膽經（少陽）		
任脉經（陰）			
督脉經（陽）			

此外尙陰の經、即ち肝經が內眦部（睛明）を通過す。

又脾經が舌根まで達す。

一、頸部に循行する經絡

胃、膀胱、膽、大腸、小腸、三焦の六腑の經と、任脉及び督脉の經、即ち七陽一陰の經にして、之を圖に示すときは

頸部			
手ノ腑	足ノ腑		
大腸經（陽明）	胃經（陽明）		
小腸經（太陽）	膀胱經（太陽）		
三焦經（少陽）	膽經（少陽）		
任脉經（陰）			
督脉經（陽）			

此外陰の二經、即ち脾經及び肝經が側頸部を、陰の腎經が前頸部を通

過す。

一、**背部に循行する經絡**

腑に属する膀胱及び督脉の經、即ち二陽の經にして、之を圖に示すときは

背部		
足ノ腑	膀胱經（陽明）	
	督脉經（陽）	

一、**肩胛部に循行する經絡**

大腸、小腸、三焦の三腑の經、即ち三陽の經にして、之を圖に示すときは

肩胛部	
手ノ腑	大腸經（陽明）
	小腸經（太陽）
	三焦經（少陽）

一、**胸部に循行する經絡**

胃、膽の二腑の經と、肺、心包、脾、腎の四臓の經及び任脉の經、即ち二陽五陰の經にして、之を圖に示すときは

胸部		
手ノ臓	肺經（太陰）	
	心包經（厥陰）	
足ノ腑	胃經（陽明）	
	膽經（少陽）	
足ノ臓	脾經（太陰）	
	腎經（少陰）	
任脉	經（陰）	

此外尙三腑の經即ち大腸經及び小腸經、三焦經と、一臟の經即ち心經が胸部を通過す。

一、腹部を循行する經絡

胃、膽の二腑の經と、脾、腎、肝の三臟の經及び任脉、即ち二陽四陰の經にして、之を圖に示すときは

腹部			
足	臟	脾經（太陰）	腎經（少陰）
	腑	胃經（陽明）	膽經（少陽）
任脉經（陰）			肝經（厥陰）

此外尙三陰の經即ち肺經、心經、心包經と、三陽の經即ち大腸經、小腸經、三焦經が腹部を通過す。

一、會陰部に循行する經絡

督脉及び任脉の一陰一陽の經が循行す、之を圖に示すときは

會陰		
督脉經（陽）		
任脉經（陰）		

Ⅶ、身體各部に於ける十四經の通路

一、上膊部

陰（臟）の三經が前內側、陽（腑）の三經が後側を通過す。

一、前膊部

陰(臟)の三經が前側、陽(腑)の三經が後側を通過す。

- 上膊
  - 後側
    - 三焦經(內側に偏す)
    - 小腸經(中央)
    - 大腸經(外側に偏す)
  - 內側
    - 心經(最內側)
    - 心包經(兩經の中央)
    - 肺經(最前側)
- 前膊
  - 後側
    - 小腸經(尺骨側)
    - 三焦經(中央)
    - 大腸經(橈骨側)
  - 前側
    - 心經(尺骨側)
    - 心包經(中央)
    - 肺經(橈骨側)

一、手指部

手指は其通路を概括して云ひ難し、然れ共も陽(腑)の大腸經が拇指側を通る他は總て陰(臟)の經が拇指側を、陽(腑)の經が小指側を通過す。

- 手指
  - 拇指—肺經(拇指側)(一枝は孔最より分岐して示指の拇指側を通過す)
  - 示指—大腸經(拇指側)
  - 中指—心包經(拇指側)(一枝勞宮より分岐して、環指の小指側を通過す)
  - 小指
    - 心經(小指側)
    - 小腸經(小指側)

一、大　腿

陰(臓)の三經が內側を、陽(腑)の三經が前外側及び後側を通過す。

- 大腿
  - 前外側
    - 胃經(前外側)
    - 膽經(外側)
    - 膀胱經(後側)
  - 後側
    - 內側
      - 肝經(前內側)
      - 脾經(內側)
      - 腎經(後內側)

一、下　腿

陰(臓)の三經が脛骨側(內前側を通るもの二經、後側を通るもの一經)を通過し、陽(腑)の三經が腓骨側(內前側を通るもの二經、後側を通るもの一經)を通過す。

- 下腿
  - 前側
    - 脛骨側
      - 肝經(前に偏す)
      - 脾經(外方に偏す)
    - 腓骨側
      - 胃經
      - 膽經
  - 後側
    - 脛骨側
      - 腎經
    - 後側
      - 膀胱經

一、足　趾

一陰(臟)が蹠趾側を通過し、其他の二陰(臟)及び三陽(腑)の經が各趾の小趾側を通過す。

- 足趾
  - 蹠趾
    - 脾經(蹠趾側)
    - 肝經(小趾側)
  - 第二趾
    - 胃經(小趾側)
  - 第四趾
    - 膽經(小趾側)
  - 第五趾
    - 膀胱經(小趾側)
    - 腎經(小趾側)

一、足關節部

一陰(臟)及び一陽(腑)の二經が前側を、二陰(臟)の經が內側を、二陽(腑)の經が外側を通過す。

- 足關節部
  - 內踝
    - 前側——脾經
    - 後側——腎經
  - 前側
    - 肝經(內側に偏す)
    - 胃經
  - 外踝
    - 前側——膽經
    - 後側——膀胱經

一、鼠蹊部

四陰(臟)及び二陽(腑)の經が通過す。

- 鼠蹊部
  - 任脉經—腹部正中線
  - 腎經—正中線の側ら五分を通過す
  - 胃經—正中線の側ら二寸を通過す
  - 肝經
    - 正中線の側ら二寸五分より溝に沿ふて四寸まで經過す
  - 脾經—正中線の側ら三寸五分を通過す
  - 膽經
    - 腸骨前上棘の前方より胃經の氣衝に至り大腿骨大轉子に向つて通過す

一、腹部

四陰(臟)及び二陽(腑)の六經が通過す。

- 腹部
  - 任脉經—正中線
  - 腎經—第一側線(正中線の側ら五分)
  - 胃經—第二側線(正中線の側ら二寸)
  - 脾經—第三側線(正中線の側ら三寸五分)
  - 膽經—側腹部(中腋窩線の通り)
  - 肝經—側腹部を不正に通過するもの

一、背部

二陽(腑)の經が通過す。

一、肩胛部

三陽（腑）の經が通過す。

- 背部
  - 督脈經—背部正中線
  - 膀胱經
    - 第一側線（正中線の側ら一寸五分）
    - 第二側線（正中線の側ら三寸）
- 肩胛部
  - 小腸經
    - 肩峰突起の後縁より大椎に至り
    - 交叉して肩上を越へるもの
  - 大腸經
    - 肩峰突起の前縁より大椎に至り肩上
    - に循行するもの
  - 三焦經—肩峰突起の後より肩上に至るもの

一、胸部

四陰（臟）及び二陽（腑）の六經が通過す。

- 胸部
  - 任脈經—胸部正中線
  - 腎經—第一側線（胸部外緣）
  - 胃經—第二側線（乳線即ち正中線の側ら四寸）
  - 脾經—第三側線（前腋窩線、即ち正中線の側ら六寸）
  - 膽經—前腋窩線より乳線を不正に上行するもの
  - 肝經—中腋窩線より乳線に至り頸部に上行するもの

一、頸部

一陰（臟）の經が前側の正中線を通過する外、七陽（腑）の經が通過す。

頸部

- 前頸部
  - 任脉經 — 前側正中線
  - 胃經 — 側頸部に偏するもの
- 側頸部
  - 大腸經 — 前頸部に偏するもの
  - 小腸經
    - 不正に通過するもの
    - 但し三焦經より前に偏す
  - 三焦經 — 不正に通過するもの
  - 膽經 — 三焦經より前方に偏す
- 後頸部
  - 膀胱經 — 大椎より二經に分岐して下行す
  - 督脉經 — 後頸部正中線

其他尙陰(臟)の三經即ち腎經及び肝經の支絡が前方、脾經の一支絡が側頸部を通過す。

一、顏面部

一陰(臟)及び七陽(腑)の經が通過す。

顏面
- 任脉經 — 前頸部より頤唇溝に至る
- 督脉經 — 人中溝より前頭の間 — 正中線
- 胃經
  - 下顎隅の前より頤部に交叉して內眦に至り、更らに小鼻翼外緣に至る。
  - 下顎隅の前より耳前を通り、前額髮際の外角を經て正中線に至るもの
- 大腸經
  - 下顎隅より上口唇に至り交叉し、小鼻翼の外緣に至る。
- 三焦經 — 耳前より眉毛の外端に至る。
- 膽經
  - 外眦より耳前に至るもの
  - 頸部側線より鼻の上方一寸を通り、內眦を經て頭蓋第一側線に至るもの

- 小腸經——耳下より耳前に至る
- 膀胱經——内眦より前頭正中線に至る。

一、頭部

陽(腑)の四經が通過す。

- 頭部
  - 督脉經——正中線
  - 膀胱經——第一側線(矢狀線の側ら一寸五分)
  - 膽經
    - 乳嘴突起端より第二側線に併行して内眦に至るもの
    - (外眦より耳前に至り)耳上を經て乳嘴突起に至るもの
  - 三焦經——耳下より耳後を經て耳上に達するもの

此外胃經(陽)が頭部及び顔面の境界なる頭維を經て神庭にまで循る。

Ⅷ、全身經絡の循行する方向

一、上肢

陰(臟)の經が下行し、陽(腑)の經が上行す。

上肢		上行(求心的)	下行(遠心的)
	陰陽	陽の經	陰の經
部位	臟腑	腑の經	臟の經
後		側	前側

一、下肢

陰(臟)の經が上行し、陽(腑)の經が下行す。

更らに上肢及び下肢に於ける經絡の循行する部位並に方向とを委しく表に示すときは左の如し。

下肢			
部位	臟腑	陰陽	
内（胃經は後に偏す）	臟の經	陰の經	上行（求心的）
前側及び外側（膀胱經は後側）	腑の經	陽の經	下行（遠心的）

上肢			
陰	行	下	
心包經	心經	肺經	
前（最内側）	前（肺經の内側）	前（最前側）	上
内側	側	内側	膊
前側中央	尺側	前橈側	前膊

上肢			
陽	行	上	
三焦經	小腸經	大腸經	
後側中央	内後側	後外側	上
後側中央（尺側に偏す）	後尺側	後橈側	膊
前膊			

下肢			
陽	行	下	
膽經	膀胱經	胃經	
外側	後側	前（外側に偏す）中央	大
腓（外踝の前に向ふ）側	後（中央より外踝に向ふ）側	前腓側	腿
内（肝經、腎經の間に在り内踝の前に向ふ）側（肝經、腎經の間）			
下腿			

下肢		
上		
脾經		
内	大	
側	腿	
内	下腿	

一、腹部

陽(腑)の二經が下行し、陰(臟)の四經が上行す。

腹		起始、終末
上行(陰)	任脉經	骨盤内臓より起始し、斷交に終り、督脉經に連る。
下行(陽)	腎經	膀胱經の交流を受けて至陰より起始し、湧泉に出で兪府に終り、任脉經に交流す。
	胃經	迎香に人膽經の交流を受けて起始し、厲兌に終る。
	脾經	隱白より腎經の交流を受けて起始し、心包を絡ひ、舌に散す。

行(陰)		
腎經	後内側	内側(外踝の後に向ふ)
肝經	前内側	内側(外踝の前に向ふ)

一、背部

陽(腑)の一經が下行し、陽(腑)の一經が上行す。

背部		起始、終末
上行(陽)	督脉經	骨盤内臓より起始し、廉泉に終り、任脉經に交流す。
下行(陽)	膀胱經	晴明より小腸經の交流を受けて起始し、至陰に至り腎經に交流す。

部		
	肝經	大敦より膽經の交流を受けて起始し、期門に至て膽を絡ふ、支絡は百會に於て督脉經に交流す。
	膽經	瞳子髎より三焦經の交流を受けて起始し、竅陰に終る、支絡は大敦に交流す。

表中經絡名の配列順は中央より順次外側に至る。

陰(臟)の四經及び陽(腑)の四經即ち八經が上行し、陽(腑)の五經、(但し小腸、大腸、膽、膀胱の各經は本系の他に更に一支絡宛あり、合して九系)が下行す。

頸

上行 四陰四陽	下行 五陽	起始、終末
任脉經		前頸部正中線
腎經		至陰より起始し、肝を貫き、肺を經て幽門より來り廉泉に終る。
脾經		腹哀を經て來り、舌根に散ず。
	胃經	大迎より分岐し來り、缺盆を經て腹腔に終る。
	小腸經	缺盆より分岐し來り、顴骨弓下緣より聽宮に入る。
	小腸經	少衝より心經の交流を受けて起始したるもの肩峰突起後緣より大椎に至り左右交叉す。
	大腸經	大椎に於て左右交叉したるもの肩上を越へ缺盆を經て小腸に屬す。
	大腸經	缺盆より分岐したるもの上口唇に至り左右交叉し迎香にて胃經に交流す。
	大腸經	商陽より肺經の交流を受けて起始し巨骨を經て大椎に至る。
	大腸經	大椎より前經を缺盆に行き大腸に屬す。
	膽經	瞳子髎より腎經の交流を受けて起始したるもの頭部を經て大椎に至り左右交叉し缺盆に入る。
	膽經	瞳子髎より分岐して缺盆に至り前のものと合す。
	膀胱經	睛明にて小腸經より交流したるもの頭部を經て背部正中線の傍ら一寸五分を下行す。

部		
	膀胱經	天柱より分岐したるもの背部正中線の傍ら三寸を下行し委中にて前のものと合す。
三焦經		膻中より分岐したるもの缺盆を經て大椎に至り天牖を經て顏面に至る。
肝經		肝に屬する處より分岐し百會に至り督脉經に合す。
督脉經		後頸部正中線

一、頭首

兩耳孔を一週する部位に於ける十四經絡

陽(腑)陰(臟)の二經及び陽(腑)の五經(但し胃、小腸、三焦の各經は二回宛、膽經は三回通過するを以て十系)が上行し、陽の五經(但し膽經は三回通過するを以つて七系)及び陰(臟)の一經が下行す。

兩耳孔を一週		
上行(二陰、五陽)	下行(一陰、五陽)	經過
	督脉經	額面正中線
肝經		肝に屬するところより分れて頭部を上行し晴明の內側を經て百會に至る。
	肝經	晴明より分れて鼻側を下行し、上口唇に於て左右交叉す。
胃經		迎香より起始して晴明に至る。
	胃經	晴明より下り口角を經て頤部に至り左右交叉す。
	三焦經	耳上より陽白、晴明を經て、顴髎に至り小腸經に合す。
任脉經		口唇を繞るところより分れて承泣に至る。

小腸經	小腸經	三焦經	胃經	膽經	三焦經	膽經	膽經
						膽經	
顴髎より分れて晴明に至る。	缺盆より分れ顴髎を經て瞳子髎に至り聽宮に終る。	屑風より分れて耳内を經、瞳子髎に至りて膽經に合す。	風池より分れ耳下を經て瞳子髎に至る。	大迎より分れ、耳前より髮際を神庭に至り、督脉經に合す。	膻中より分岐し、大椎を經て耳後より耳上に至る。	瞳子髎より腎經の交流を受けて起始したるもの前頭より耳上を耳後に廻り乳嘴突起端に至る。	乳嘴突起端より耳後を上る。

經絡

督脉經	膀胱經	膽經	膽經	膽經
	晴明より小腸經の交流を受けて起始し、頭部副矢狀線を經て背部に至る。	顴髎線より風池に下る。	晴明より顴髎線を上る。	耳後を上りたるもの陽白を經て晴明に至る。
大椎を經て矢狀線を上る。				

眉部を一週する部位を通過する經絡

陰(臟)の二經及び陽(腑)の四經(但し陽の四經は膽が四回通過するを以つて七系)が上行し、陰(臟)の一經及び陽の三經(但し陽の三經は膽が四回通過するを以つて六系)が下行す。

眉部を一週する部位

上行（二陰、四陽）	下行（一陰、三陽）	經過
	任脉經	顏面正中線
膀胱經		小腸經の交流を受けて睛明より起始し、神庭に會合し、再び分れて副矢狀線を上行す。
膽經		睛明より頭部第二側線を上行す。
	三焦經	陽白より睛明を經て顴髎に至り小腸經に合す
	膽經	本神、陽白を經て睛明に至る。
肝經		肝に屬する處より分れたもの百會に至り督脉經に合す。
膽經		瞳子髎より起始したるもの聽會、上關を經て頷厭に上る。
胃經		下顎隅より分れ耳前髮際を神庭に至り督脉經と會合す。

絡經四十るけ於に

	膽經	頷厭より耳前髮際を懸釐に至る。
膽經		懸釐より曲髮を經て率谷に至る。
三焦經		腦中より分れたるもの大椎に會合し、耳後を經て耳上に上り陽白に至る。
	膽經	率谷より耳後を經て完骨に至る。
膽經		完骨より耳後を經て耳上に上り、本神を經て陽白に至る。
	膽經	頭部第三側線を經て下行するもの、風池を過ぎ陽白に至る。
膀胱經		頭部第一側線より來るもの、天柱を經て背部に下行す。
任脉經		頭部矢狀線を背部より上る。

XI、十四經絡の起始終末表

	起始	交流	終末	內臟との關係
肺經	上腹部（中焦）	示指（商陽）	一枝 拇指（少商）に交通す	一枝 天樞の部に於て大腸を絡ひ、胃の兩側より肺に屬す。
大腸經	示指（商陽）	小鼻翼外下緣（迎香）		一枝 缺盆より肺に入り腹部に下行して天樞の部に至り大腸を絡ふ。
胃經	小鼻翼外下緣（迎香）	蹠趾（隱白）	一枝 次趾（厲兌）に交通す	一枝 缺盆より上脘、中脘の邊に至り胃に屬し脾を絡ふ。
脾經	蹠趾（隱白）	心に注ぐ	一枝 舌根に散す	腹部に至り脾に屬し胃を絡ふ。
心經	心	小趾（少衝）		腹に入り下脘に至りて小腸を絡ふ。

	起始	交流	終末	內臟との關係
小腸經	小趾 小衝より少澤を經て起る	內眦（晴明）	一枝 聽宮に交通す	心を絡ひ胃を通り小腸に屬す。
膀胱經	內眦（晴明）	小趾（至陰）	一枝 耳上に分散す。	百會にて左右合して腦を絡ひ、二行通腎俞にて腎を絡ひ膀胱に屬し膀胱を絡ふ。
腎經	小趾（至陰）	胸內（膻中）	一枝 結喉上部（廉泉）に交通す	肝を貫き肺に入る 一枝—肓俞より分れ腎に屬し膀胱を絡ふ 一枝—心に注ぎ膻中に入る。
心包經	胸內（膻中）	環指（關衝）	一枝 中指（中衝）に交通す	膻中より心包に屬し、腹に入り三焦を絡ふ。
三焦經	環指（關衝）	外眦（瞳子髎）一枝顴髎に入る		心包を絡ひ腹に入り三焦に屬す。
膽經	外眦（瞳子髎）	蹠趾（大敦）	一枝 第四趾（竅陰）に交通す	缺盆より右側のものは肝を絡ひ兩側とも膽に屬す。
肝經	蹠趾（大敦）	上腹部（中焦）	一枝—顱頂部（百會）に交通す 一枝—上口唇にて左右交通す。	一枝 下腹部（關元）より肝に屬し膽を絡ふ。
督脈經	骨盤內	斷交より任脈に會合す	一枝—承泣に交通す	骨盤內臟器（內生殖器より起始）

任脉經	骨盤內	斷交より督脉に會合す	骨盤內臟器（內生殖器より起始）

第七章　奇　經

前章に記載せる十二經の他尙奇經と稱する一種の系を有す。

奇經は元來八經ありて古來奇經八脉と稱するのであるが、此八脉中任脉及び督脉の二脉は十二經に加へ十四の本經となすものにして、通常奇經として數ふるものは左の八脉中

（第一　任　脉）
（第二　督　脉）
第三　衝　脉
第四　陰　蹻　脉

第五　陽蹻脈
第六　陰維脈
第七　陽維脈
第八　帶　脈

第三、衝脈以下の六經とす。

而して八脈中任脈、督脈、帶脈の三經は無對として其他の五經は有對の經である。

但し帶脈の穴は左右有對なる故これを有對の經とするも差支へなし。

即ち任脈は腹部及び胸部正中線を顏面に向つて上行し、督脈は背部正中線を同じく縱徑に上行す、而して帶脈に腹部を臍窩の位置に於て一週す。

各經の起始は次の如し。

任　脈
督　脈
衝　脈

以上の三經は骨盤內より起始す。

陰蹻脈
陽蹻脈
陰維脈
陽維脈

以上の四經は足より起始す。

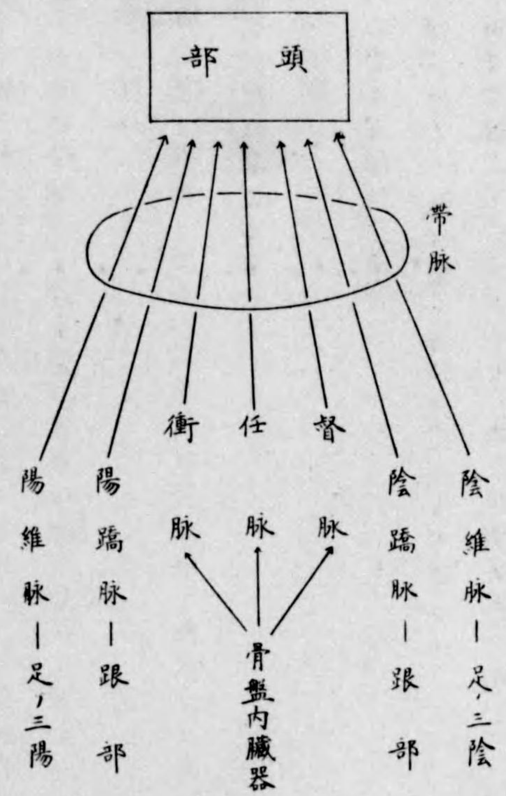
帶　脈

章門の邊より起始す。

其終末は帶脈を除くの他は悉く皆頭部に至りて終る。

以上を圖に示すときは

一、奇經の經路



第一　任脈

第二　督脈

以上の二經の經路は前項の十四經絡に於て說明せる故玆に省略す。

第三　衝脈

任脈及び督脈と共に骨盤内臓器より起始し、氣衝（鼠蹊溝の正中）に至り腎經に沿ふて腹部を上行し胸中より喉頭に會し口唇に散ず。

一枝は氣衝より腎經に沿ふて下行し足蹠に廻りて涌泉に入る。

又其枝別は内踝の下より分れて足背に出で爵趾に至りて胃經に交流す。

第四　陰蹻脈

陽蹻脈と共に踝部に起り、然谷（第一蹠骨と楔狀骨との關節部にて白肉際に在り）より内踝の前を腎經と共に並びて上行し、陰部より腹部及び胸部を經て喉頭を挾み、人迎（甲狀軟骨上緣にて前頸部正中線を距る一寸に在り）の前にて衝脈と交通し夫れより顏面に出で睛明（内眦）に終る。

其分枝は尙上行して後頸部に至り風池（項部髮際にて耳垂と同じ高さに在り）に於て陽蹻脉と共に終る、此經は腎經の別絡である。

第五　陽蹻脉

陰蹻脉と共に踝部より起始し、申脉（外踝の直下にて白肉際）より膀胱經に沿ふて上行し大腿外側より居髎（膽骨前上棘の前上方）を經て更に上行し腧俞（肩峰突起の後下方）に至りて陽維脉と會合し、頤部に上り鼻孔の外側より睛明（內眦）に至り尙上行して耳後より風池に至り陰蹻脉と共に終る。

第六　陰維脉

諸陰の交に起るといふ、足の三陰、即ち脾經（蹠趾端の脛骨側より發す）、腎經（小趾の外端より發す）肝經（蹠趾端の小趾側より發す）の起始部に交通して發するのである、築賓（內踝の後緣の通りにて內踝の直上五寸）より腎經に沿ふて大腿內側を上行し腹部及び胸部を經て頸部正中線の天突（胸骨頸截痕の上緣）、廉泉（顎下部にて舌骨體の上緣）を通過し前額部に至り散す。

第七　陽維脉

諸陽の會に起ると云ふ、足の三陽即ち膀胱經（小趾にて腎經と交通す）、膽經（蹠趾にて肝經と交通す）、胃經（蹠趾にて脾經と交通す）の起始部に交通して發するのである、金門（外踝の下方一寸）より陽交（外踝の正中より上方七寸）を通り膀胱經に沿ふて大腿外側を上行し居髎（膽骨前上棘の前上方）に會す、夫れより側胸部を腧俞（肩峰突起の後下方）に至り上膊を經て大椎（第七頸椎の上際）に會し耳後より風池（項部髮際にて耳垂の高さ）を通り本神（頭部正中線の外方三寸にて前髮際を入る四分）に至りて終る。

第八　帶脉

章門（第十一肋骨の端）より起りて帶脉（第十一肋骨の端より下方一寸八分、或は臍上二分の點より傍ら七寸五分とも云ふ）の穴より軀幹を横經に一週す、後は命

門（骨部第一腰椎体の下際）、前は神闕（臍窩）を貫通し、一部は五樞、維道（共に腸骨の前上棘の稍上方）に下行す。

Ⅱ、奇經の起始及び終末

奇經八脉の起始、終末及び經過を表に示すときは次の如し。

奇經の起始

脉名	起始	終末	經過
衝脉	骨盤内臓	一枝―口唇に散ず 一枝―踝趾に至り胃經に交通す	腎經に沿ふ
陰蹻脉	跟部	本經―人迎の前にて衝脉と交通し晴明に終る 一枝―風池にて陽蹻脉に合す	腎經の別格 但し下肢に於ては腎經に沿ふ
陽蹻脉	跟部	晴明より耳上を經て耳後に廻り陰蹻脉と共に風池に合す	膀胱經の別絡 下肢の外側より臑兪を經て上る

經過の終末

陰維脉	足の三陰の交	天突、廉泉を經て前額に散ず	腎經に沿ふ
陽維脉	足の三陽の會	本椎より風池を經て本神に至る	膀胱經に沿ふ 但し軀幹にては側胸腹部を上る
帶脉	章門	腰腹部を一週す	命門、神闕を通過す
任脉	骨盤内臓	斷交より督脉に交通す	胸腹部正中線
督脉	骨盤内臓	斷交より任脉に交通す	腰背部正中線

Ⅲ、各奇經に屬する穴名

第一、衝脉

横骨（腎）　大赫（腎）　氣穴（腎）　四滿（腎）　中注（腎）

盲俞（腎）　商極（腎）　石關（腎）　陰都（腎）　通谷（腎）

幽門（腎）

通過するもの……氣衝（胃）

支絡……涌泉（腎）

別枝……厲兌（胃）

第二、陰蹻脉

然谷（腎）　照海（腎）　交信（腎）　晴明（膀）

會合するもの……風池（膽）

第三、陽蹻脉

申脉（膀）　僕參（膀）　跗陽（膀）　居髎（膽）　巨骨（大）

肩髃（大）　臑俞（小）　地倉（胃）　巨髎（胃）　承泣（胃）

晴明（膀）　風池（膽）

第四、陰維脉

築賓（腎）　府舍（脾）　大横（脾）　腹哀（脾）　期門（肝）

天突（任）　廉泉（任）

第五、陽維脉

金門（膀）　陽交（膽）　臂臑（大）　臑會（三）　天髎（三）

大椎（督）　肩井（膽）　風池（膽）　腦空（膽）　承靈（膽）

正營（膽）　目窓（膽）　臨泣（膽）　陽白（膽）　本神（膽）

會合するもの……居髎（膽）　臑俞（小）

第六、帶脉

章門（肝）　帶脉（膽）　五樞（膽）　維道（膽）

通過するもの……命門（督）　神闕（任）

第七、任脉

第八、督　脉

以上二經は省略す。

Ⅲ、奇經の陰陽

一、任　脉

陰に屬す。

一、督　脉

陽に屬す。

一、衝　脉

腎經の別絡と認むべきものにして陰に屬す。

一、陰蹻脉

腎經の別絡として陰に屬す。

一、陽蹻脉

膀胱經の別絡として陽に屬す。

一、陰維脉

足の三陰の交に發するものにして陰に屬す。

一、陽維脉

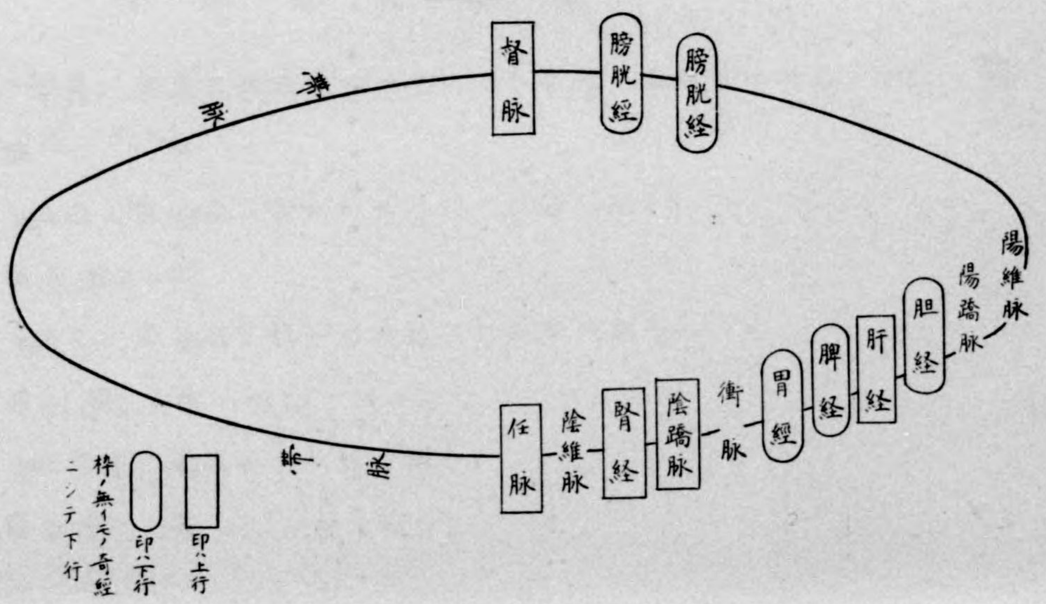
足の三陽の會に發するものにして陽に屬す。

一、帶　脉

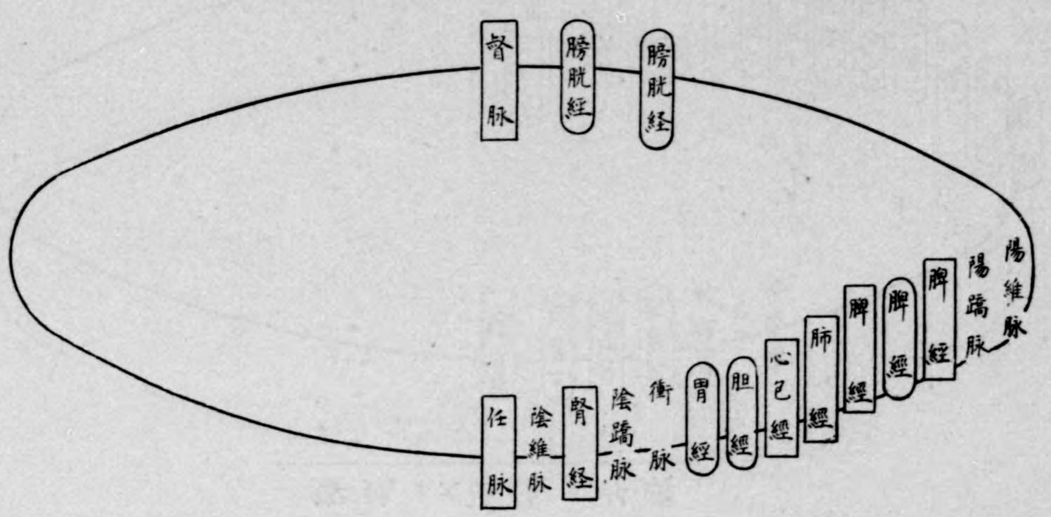
陰陽の諸經に交通するものにして陰陽に偏せざるものとす。

腹背ヲ通過スル經絡

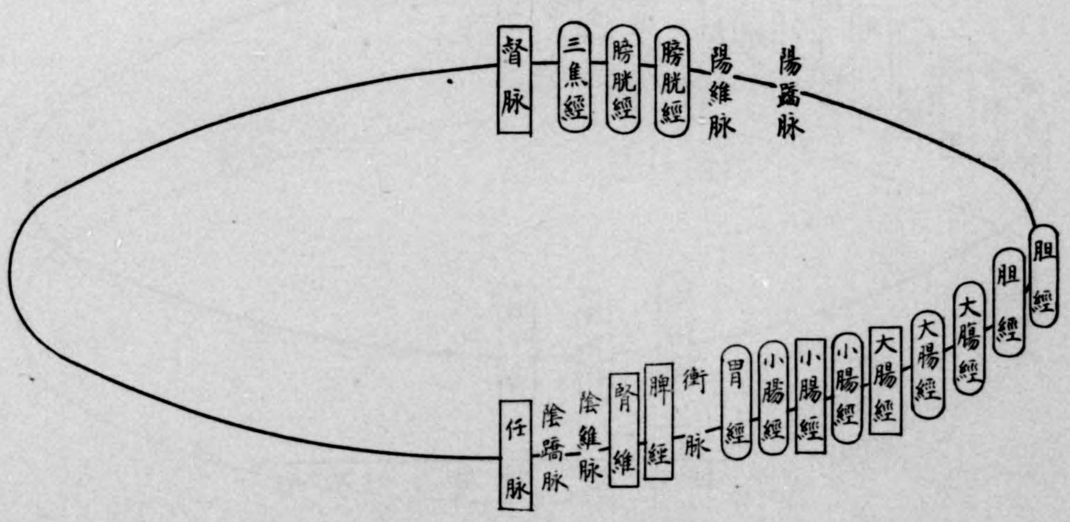
（帶脈）



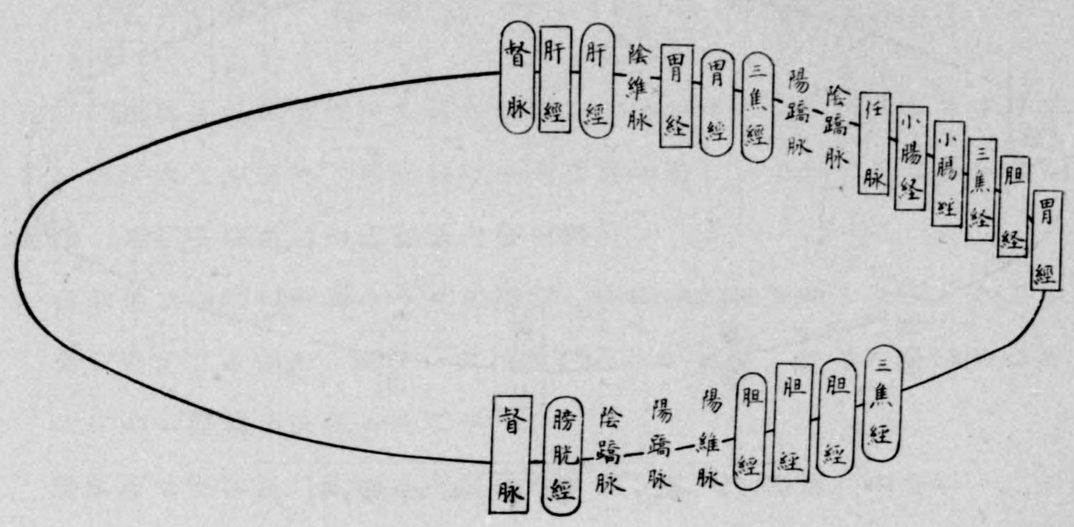
胸背部ヲ通過スル經絡

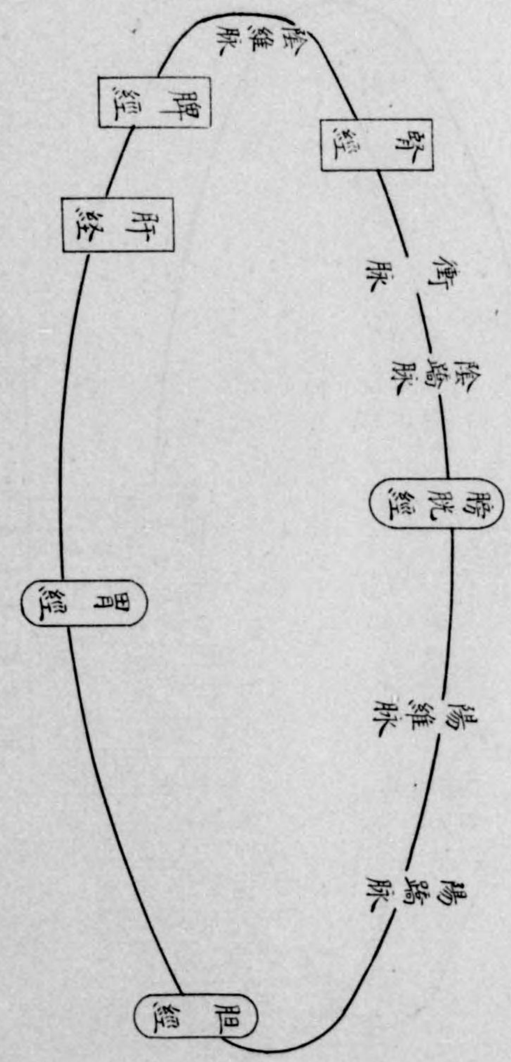


頭部ヲ通過スル經絡



頭部額面ヲ通過スル經絡





絡經ルス過通ヲ腿大

第九章　經絡の主なる交通點

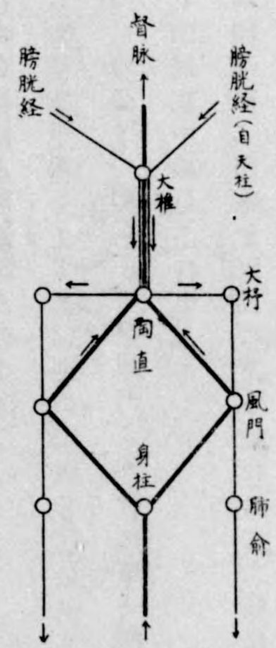
十二經絡は各經順次交流する外尙任脉及び督脉と交通し、更らに其各經絡は諸所に於て屢相互に交通す、其主要なる交通點を擧げてみるときは左の如し。

一、陶道、風門が督脉經と膀胱經との交通

督脉經は背部正中線を上り第三椎の下際（身柱）に至ると左右に分岐し膀胱經の風門に會合す、而して再び風門より分れ第一椎の下際（陶道）に至りて左右合し頭部正中線を上行す。

膀胱經は頭部第二側線を天柱に下り玆に於て二枝絡に分岐し、一支絡は背部第二側線を下り、一支絡は大椎に至り督脉經に沿ふて陶道に至り再

び左右に分岐して大杼に至り背部第一側線を下行す。



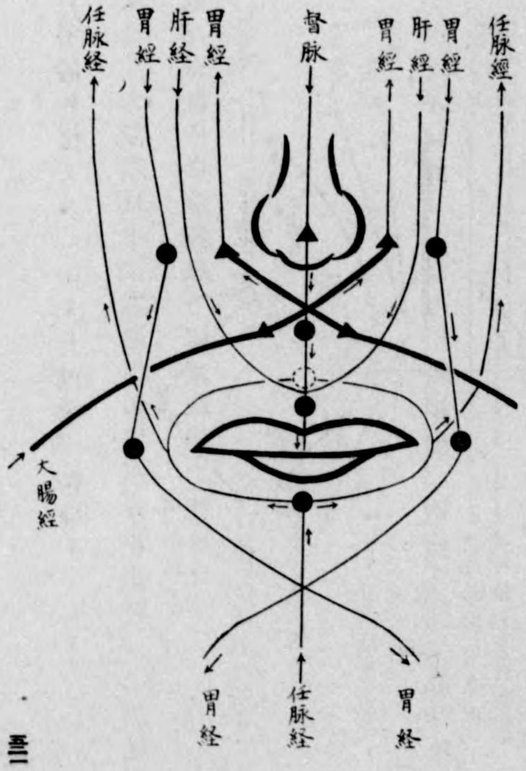
一、鼻口部に於ける督脉經、任脉經、大腸經、胃經、肝經の交通

督脉經は顏面正中を下り斷交(上唇繫帶の根部)に至り任脉經に吻合交通す、**任脉經**は頤部正中を上り頤唇溝の中央(承漿)に至り左右に分岐して口角を廻り斷交に至りて督脉經と吻合交通す、而して一枝口角の邊より分れ上行して承泣に至り胃經に交通す。

大腸經は缺盆(鎖骨中央の上際)より來り人中溝の中央に於て督脉經に交叉し迎香にて胃經の起始部と交流す。

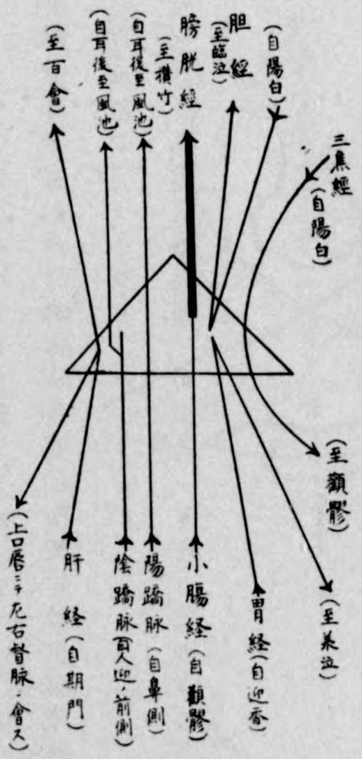
胃經は迎香にて大腸經と交流し上行して睛明及び承泣を經て巨髎、地倉を下り頤部の中央に於て任脉經と交叉す。

肝經は內眦部より分れて下行し人中溝の中央に於て督脉經に會合す。



一、晴　明（膀胱經）

晴明に交通する諸經は十二經絡中の胃經、小腸經、三焦經、膽經、肝經の五系及び奇經中の陰蹻脉、陽蹻脉の二系とす。



此内、**胃經**は下方（迎香）より晴明に入りて又下方承泣に出づ。

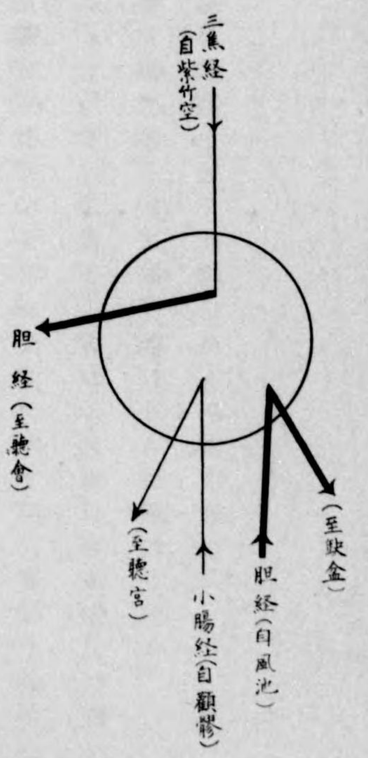
膽經は上方より陽白を經て此處に來り又上方に出で臨泣を經て頭部第二側線を上る。

肝經は下方より期門を經て此處に來り又下方に出で人中溝に於て左右會合す。更に其一支絡は上方に出でゝ百會に至る。

三焦經は陽白より此穴に來り、又下方頰髎に向つて出づ。

一、瞳　子　髎（膽經）

瞳子髎に交通するものは十二經絡中の三焦經及び小腸經の二系とす。



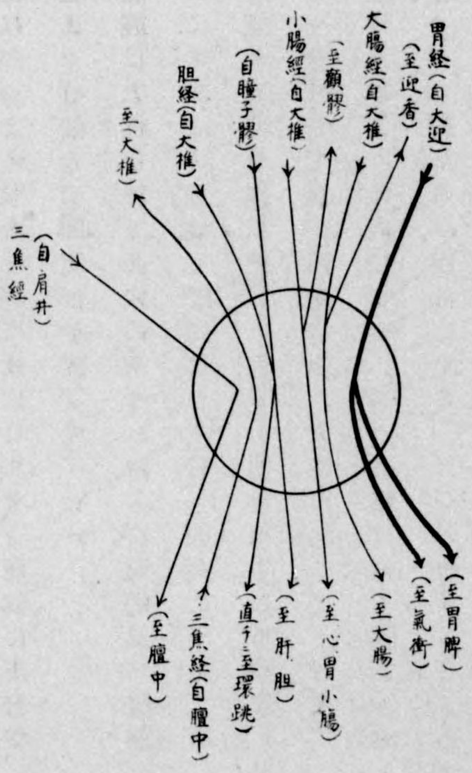
此内、膽經は三焦經の交流を受けて瞳子髎に起始し聽會に向つて出で、又膽經の一支絡は風池より分れて此處に來り缺盆に向つて出づ。

三焦經は絲竹空を經て瞳子髎に來り膽經に交流す。

小腸經は顴髎を經て此處に來り聽宮に終る。

一、缺盆（胃經）

缺盆に交通するものは十二經絡中にて大腸經、小腸經、三焦經、膽經の四經とす。



此内、大腸經は大椎より缺盆に來り下行して胸部及び腹部に向ふ。又一

支絡はこの處より分岐して顔面に至り胃經に交流す。

胃經は顔面より氣舍を經て此穴に來り、腹部に下行す、又一支絡はこの處より分岐して胸腹部を直下す。

小腸經は大椎を經て此穴に來り、直ちに胸部及び腹部に至る、又一支絡はこの處より分岐して頸部を上行し顔面に至る。

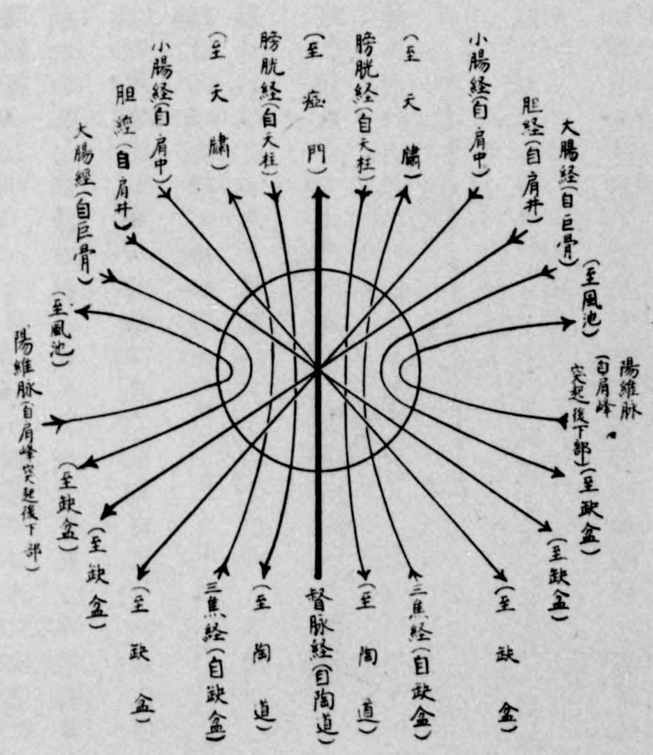
三焦經は肩井を經て此穴に來り、胸部膻中に下行す、又其一支絡は膻中より分岐して再び缺盆に來り大椎に向つて上行す。

膽經は大椎より此穴に來る、又一支絡は瞳子髎より來りこの處にて前支絡と合し胸部及び腹部に至る、又この合するところより一支絡を生じ胸腹部を直下して環跳に下行す。

一、大椎（督脉經）

大椎を通過するものは十二經絡中、大腸經、小腸經、膀胱經、三焦經、

膽經の五系及び奇經中の陽維脉とす。



此内、膀胱經は天柱より大椎に來り督脉經と共に陶道にまで至り、再び左右に分岐す。

膽經は肩井を經て來り大椎に於て左右交叉し缺盆に向ふ。

小腸經は肩峰突起の後緣（肩中を經て）より來り、大椎に於て左右交叉し缺盆に向ふ。

三焦經は缺盆より此穴に來り、天牖に向つて出づ。

大腸經は肩峰突起の前緣（巨骨を經て）より此穴に來り、缺盆に向つて出づ。

陽維脉は膸俞（肩峰突起の後下部）を經て此穴に來り、風池に向つて出づ。

一、風　池（膽經）

風池に交通するものは奇經中の陰蹻脉、陽蹻脉、陽維脉の三系とす。

此内、膽經は腦空を經て風池に來り肩井に向つて出づ、この處より一支絡分岐し耳下を經て瞳子髎に向ふ。

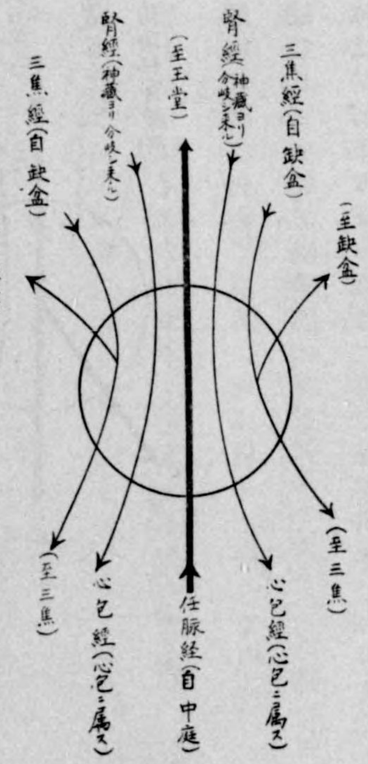
陽蹻脉は睛明より來り風池に於て終る。

陰蹻脉は本經は睛明に終るも一支絡は睛明より生し風池に至りて終る、

陽維脉は大椎を經て此穴に來り、本神に向つて出づ。

一、膻中（任脉經）

膻中に交通するものは十二經絡中の腎經、三焦經、心包經の三系とす。



此内、腎經は神藏より分岐して來り、膻中に於て心包經に交流す。

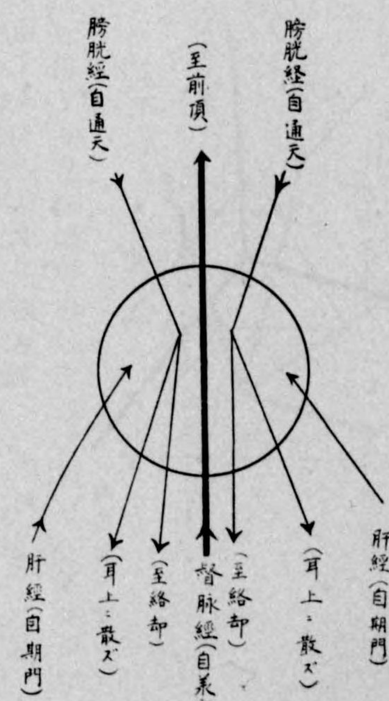
心包經は膻中より起始し、心包に屬し三焦に向つて出づ。

三焦經は缺盆より此穴に來り、又三焦に向つて出づ、この處より一支

絡を生じ再び缺盆に向つて出づ。

一、百會（督脉經）

百會に交通するものは十二經絡中の膀胱經及び肝經の二系とす。

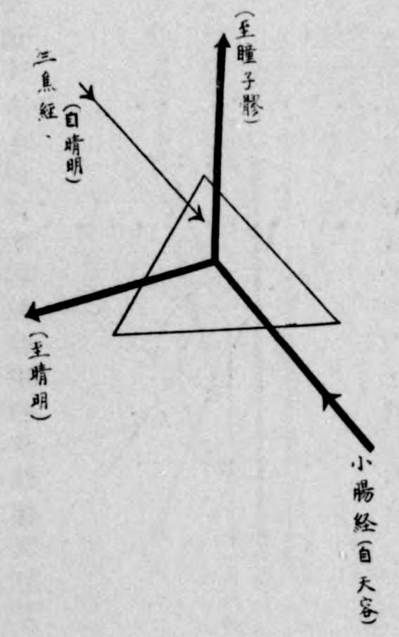


此内、膀胱經は頭部第一側線を通天にまで來りて百會に會合し再び絡却に向つて左右に出づ、この處より一支絡生じ耳上に散ず。

肝經は期門より上行して此穴に來り會合す。

一、顴　髎（小腸經）

顴髎に交通するものは十二經絡中、三焦經の系とす。

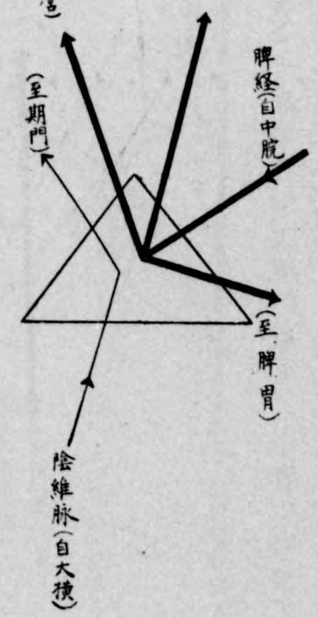


小腸經は缺盆より來り天容を經て顴髎に至り瞳子髎に向つて出づ、又この處より一支絡を生じ睛明に上りて膀胱經に交流す。

三焦經は耳上より睛明を經て此穴に來り小腸經に會合す。

一、腹　哀（脾經）

腹哀に交通するものは奇經中の陰維脉一系とす。

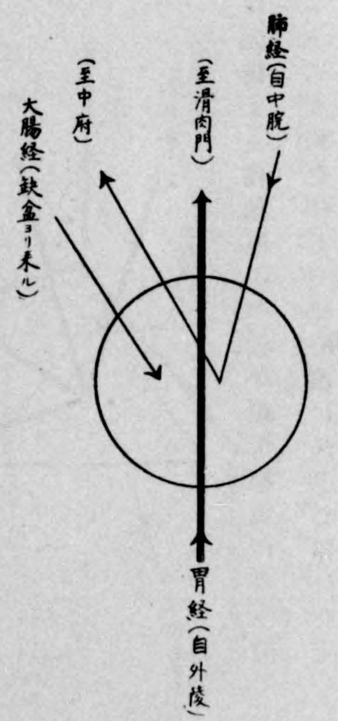


脾經は大横より任脉經の中脘を經て腹哀に來り出でゝ脾及び胃に屬すこゝより二支絡を生じ一は心臟に注ぎ心經に交流し、一は周營を經て胸部を上行す。

陰維脉は大横を經て此穴に來り期門に向つて出づ。

一、天　樞（胃經）

天樞に交通するものは十二經絡中の肺經及び大腸經の二系とす。

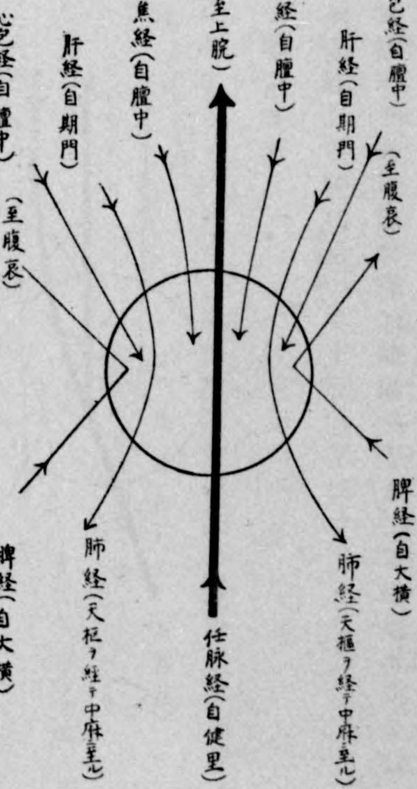


此內、肺經は中脘より起始して天樞に來り、中府に向つて出づ。

大腸經は缺盆より此穴に來り天樞の部に於て大腸に屬す。

一、中　脘（任脈經）

中脘に交通するものは十二經絡中の肺經、脾經、三焦經、肝經、心包經の五系とす。



此內、肝經は期門より分岐して來り中脘に於て肺經の起始部に交流す。

肺經は肝經の交流を受け天樞を經て中府に向つて出づ。

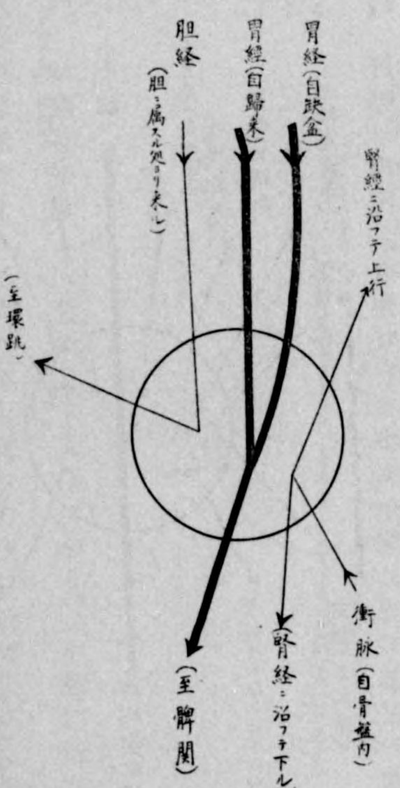
脾經は衝門より大橫を經て此穴に來り、腹哀に向つて出づ。

心包經は膻中より心包に屬して此穴に來り絡る。

三焦經は膻中より此穴に來り中脘に於て中焦を絡ふ。

一、氣衝（胃經）

氣衝に交通するものは十二經絡中の膽經一系と、奇經の衝脉とす。



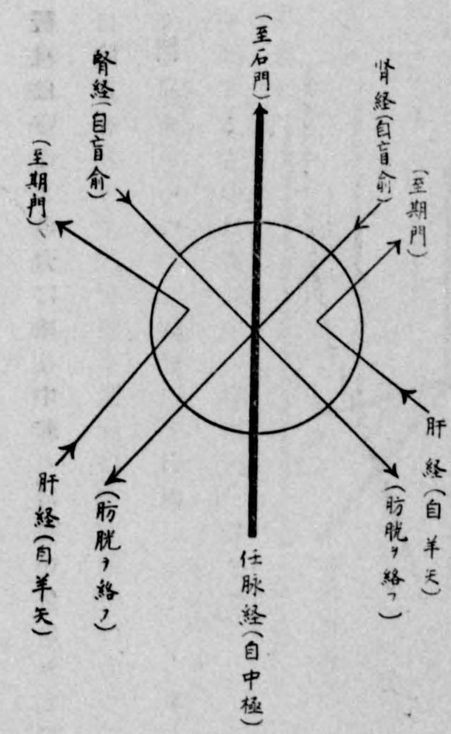
胃經は歸來を經て腹部第二側線を下り、又缺盆より分岐したる一支絡は胸腹部を直下して氣衝に來り合し、髀關に向つて出づ。

膽經は膽に屬する邊より分れて此穴に來り環跳に向つて出づ。

衝脉は骨盤內より來り此穴を經て腎經に沿ひ上行す、又一支絡はこの處より分岐し腎經に沿ふて下肢へ下行す。

一、關元（任脉經）

關元に交通するものは十二經絡中の肝經及び腎經の二系とす。

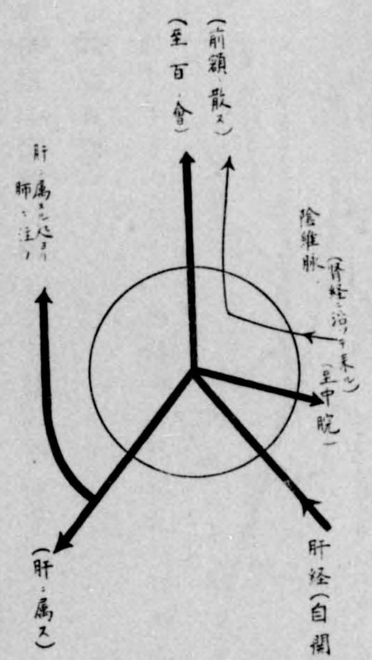


此内、**腎經**は盲俞より腎に屬して來り、關元を過りて膀胱を絡ふ。

肝經は陰部を循り羊矢を經て關元に來り期門に向つて出づ。

一、期　門（肝經）

期門に交通するものは奇經中の陰維脉一系とす。



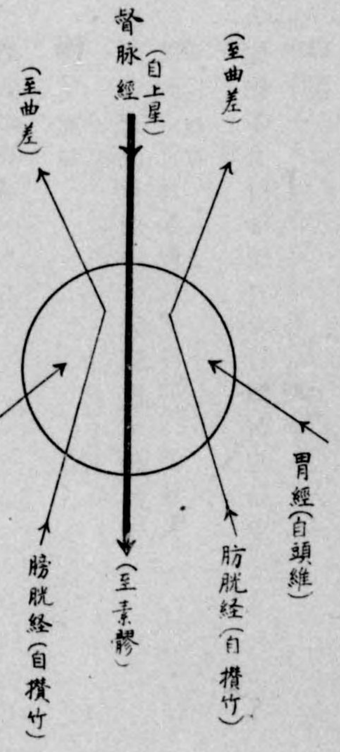
肝經は關元を經て期門に來り、下方に出でゝ肝に屬し膽を絡ふ。この處より二支絡を生じ一枝は百會に至りて督脉に會合し、一枝は中脘に

至り肺經の起始部に交流す。

陰維脉は腎經に沿ふて此穴に來り前額に至り散ず。

一、神　庭（督脉經）

神庭に交通するものは十二經絡中の胃經及び膀胱經の二經とす。



此内、**膀胱經**は攢竹を經て神庭に來り左右會合し、再び別れて曲差に至

る。

胃經は頭維を經て此穴に來り督脉經に會合す。

以上の外尙左の諸穴の交通がある。

一、商陽（大腸經）　商陽は肺經の交流を受けて大腸經が起始す。

一、迎香（大腸經）　迎香は大腸經の交流を受けて胃經が起始す。

一、隱白（脾經）　隱白は大腸經の交流を受けて脾經が起始す。

一、少衝（心經）　少衝は心經の交流を受けて小腸經が起始す。

一、至陰（膀胱經）　至陰は膀胱經の交流を受けて腎經が起始す。

一、廉泉（任脉經）　廉泉は腎經が左右より任脉經に會合して終る。

一、關衝（三焦經）　關衝は心包經の交流を受けて三焦經が起始す。

一、大敦（肝經）　大敦は三焦經の交流を受けて肝經が起始す。

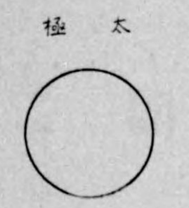
陰陽篇

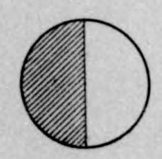
陰陽篇

漢方醫學に於ては人體陰陽元氣の順行する狀態を三陰三陽を以て表示するものにして太陰、少陰、厥陰、太陽、少陽、陽明の名稱は總べて疾病にも經絡にも用ひられ、又これを以て病理的にも治療上にも陰陽の消長を現はすことになつて居る、夫れ故に灸療、鍼治を學ぶもの、經穴の研究をなすものは此三陰三陽を能く知らねばならぬ、而してこれを解するには先づ易の哲理即ち陰陽の學理の大要を知得することを要するので、それ故に玆に少しくこれを述べることにする。

I、太極と陰陽

通書に曰ふ、「太極は動て陽を生じ、陽極つてに靜に歸す、靜にして陰を生じ陰極つて動を生ず」と、即ち太極は動て陰陽を生じ常に其消長あること丁度大海に潮流の干滿があつて永久に停止することの無いのと同じようなもので、而して其陰陽の消長と相互の交錯とに依つてそこに天地を生じ、森羅萬象を現はすことは宛かも電子が種々に結集し化學的元素を生じて萬物を形成したり、陰陽電氣の分合に因つて平靜なる天空に雲を呼び、風を起し、電閃き、雷轟くが如き現象を露はすようなものでる。





陰陽とは例へば電氣の積極と消極との如きものであつて、或は又これと同じことを意味するとも云ひ得るのである。

I、陰陽の變合消長

陰陽分れて天地となり其消長を以て五行を生じ、四時行はれ、其交錯によりて萬象を發現し萬物を化成す。

天地發現に次で萬物發生の根元をなすものを五行とす。

1、五行

木、金、火、水、土。

但しこれを四大とすれば

地、水、火、風とす。

五行の木、金、火、水、土を方位に配するときは左の五位となる。

2、五　位

東、西、南、北、中。

これを色に配するときは

3、五　色

青、白、赤、黑、黃。

これを味に配するときは

4、五　味

酸、辛、苦、鹹、甘。

これを音に配するときは

5、五　音

角、商、徵、羽、宮。

これを數に配するときは

6、五　數

三・八。四・九。二・七。

一・六。五・十。

これを五常に配するときは

7、五　常

仁、義、禮、智、信。

これを內臟に配するときは左の五臟とす。

8、五　臟

肝、心、肺、腎、脾。

Ⅱ、陰陽の數

陰陽の數を分類するときは

陽の數

一・三・五・七・九。

之を天の數とす。

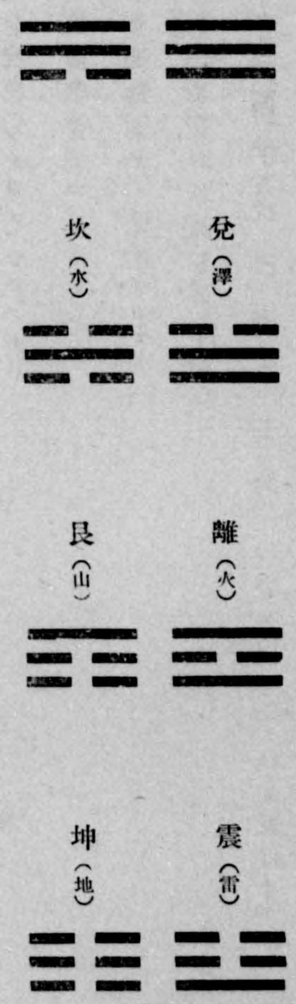
陰の數

二・四・六・八・十。

之を地の數とす。

Ⅲ、八卦

陰陽を卦に現はすときは



Ⅳ、四時と干支

1、四時

四時は春、夏、秋、冬にして、これを月に當てるときは左の如し。

春　一月、二月、三月。

夏　四月、五月、六月。

秋　七月、八月、九月。

冬　十　月、　十一月、　十二月。

但し四時及び月は總べて大陰暦に據る。

2、十　干

十干は木、火、土、金、水の五行の各に具ふる剛柔、即ち陰陽を分ちて兄弟（エト）となし、これを十干に表現したるものにして

木を甲乙（キノエ、キノト）

火を丙丁（ヒノエ、ヒノト）

土を戊己（ツチノエ、ツチノト）

金を庚申（カノエ、カノト）

水を壬癸（ミヅノエ、ミヅノト）

となしたるものである、即ち

甲乙丙丁戊己庚辛壬癸。の字を以てこれを表はす。

○、陰陽と十干

十干を陰陽に區別するときは

甲丙戊庚壬、を陽とす。

乙丁己辛癸、を陰とす。

3、十　二　支

十二支は、天の十二宮の列宿に配する二十六禽の其正位に在る禽獸の名を名稱とせるものである。

子　丑　寅　卯　辰　巳　午　未　申　酉　戌　亥。

○、陰陽と十二支

十二支を陰陽に分つ「と、き」は

陽に属するもの

子　寅　辰　午　申　戌（六律）

此六陽を大過と云ふ。

陰に属するもの

丑 卯 巳 未 酉 亥（六呂）

此六陰を不及と云ふ。

4、月と十二支

月を十二支に配するときは左の如し。

正月　寅
二月　卯
三月　辰
四月　巳
五月　午
六月　未
七月　申
八月　酉
九月　戌
十月　亥
十一月　子
十二月　丑

5、月と陰陽

一年（十二月）に於ける陰陽の變化を示すときは左の如し、

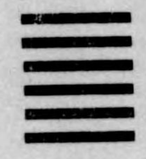
正月（三陽生）　（地天泰）三陰三陽

二月（四陽生）　（雷天大壯）二陰四陽

三月（五陽生）

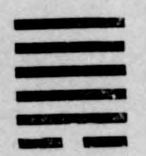
（澤天夬）一陰五陽

四月（六陽生）



（乾爲天）六陽

五月（一陰生）



（天風姤）五陽一陰

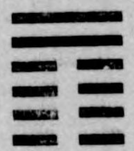
六月（二陰生）

（天山遯）四陽二陰

七月（三陰生）

（天地否）三陽三陰

八月（四陰生）



（風池觀）二陽四陰

九月（五陰生）

（山地剝）一陽五陰

十月（六陰生）

（坤爲地）六陰

十一月（一陽生）

（地雷復）五陰一陽

十二月（二陽生）

（地澤臨）四陰二陽

即ち十月が陰の極にして、夫れより毎月下から陽氣が加はり正月には下半部が陽上半部が陰となる、更らに漸次陽の氣が增加し四月に至りて陽の極となる。

五月より陰氣が下より發し七月に至りて下半部が陰、上半部が陽となる而して陰の氣が尙漸次增加して十月に至り陰の極となるのである、故に十一月の五陰一陽と、九月の一陽五陰とは其陰陽の數は同じようである が實際は十一月は五陰に一陽の加はりたるもの、九月は五陰に一陽の殘れるものにして同一のものにあらず。即ち陰より陽に進むものと、陽より陰に進むものとであつて、それは日々の推移に依り時間の經過に依りて刹那々々に變化することを知ればこれが同一で無いことを知るのである、故に四陰二陽の十二月及び八月も、三陰三陽の正月及び七月も、二陰四陽の三月及び六月も、一陰五陽の三月及び五月も皆共に陰陽同數

であるが、其發現の異ることは此理に依つて知られ、從つて又それが同一現象で無いことが解かるのである。

6、月と律呂

月と律呂の關係は左の如し。

正月	太簇	(律)
二月	蕤鐘	(呂)
三月	姑洗	(律)
四月	仲呂	(呂)
五月	夾賓	(律)
六月	林鐘	(呂)
七月	夷則	(律)
八月	南呂	(呂)

九月　無射（律）
十月　應鐘（呂）
十一月　黃鐘（律）
十二月　大呂（呂）

7、六律六呂

律は陽にして、呂は陰に屬す。

律　太簇、姑洗、蕤賓、夷則、無射、黃鐘。

呂　夾鐘、仲呂、林鐘、南呂、應鐘、大呂

8、二十四節

一年の二十四節を月に當てゝ之を示すときは左の如し。

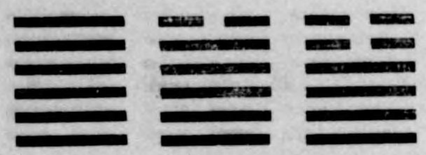
正月	立春	雨水
二月	驚蟄	春分
三月	晴明	穀雨
四月	立夏	小滿
五月	芒種	夏至
六月	小暑	大暑
七月	立秋	處暑
八月	白露	秋分
九月	寒露	霜降
十月	立冬	小雪
十一月	大雪	冬至
十二月	小寒	大寒

Ⅵ、陰陽の分類

一、六陰六陽

陰陽の消長を六陰六陽に分ち、之を月に當てるときは左の如し。

六陽



二月　三月　四月

六陰

五月　六月　七月　八月　九月

十月　十一月　十二月　正月

2、三陰三陽

前項記載の如く陰陽を六陰六陽に分ち、これを月に當ててみるときは其月の陰陽の關係を略覗ひ知ることを得るのである。

而して漢方醫學に於て總べて生理、病理、治療等に用ふる三陰（厥陰、少陰、太陰）三陽（少陽、陽明、太陽）に就いて、陰陽の關係と其發現とを知るためには其月と季節の狀況とを知れば亦容易にこれを解することを得るのである。

但し玆に記載する季節の說明は「禮記月令」に據る。

1、三陰

厥陰（八月）

陰氣の增進する象にして、卦に於ては四陰に尙二陽を殘有す、而して月に於ては八月に相當し、二十四節にては白露及び春分の節に當る。

白露

鴻雁來り玄鳥鳴き群鳥養羞す。

秋分

雷聲を收め蟄虫戸を坏ぎ水始めて涸る。

少陰（十月）☷

少陰は陰氣の充滿せる象にして、卦に於ては六陰、而して月に於ては十月に相當し、立冬、小雪の節に當る。

立冬

水始めて凝り地又凍る、雉子は大水に入りて蜃となる。

小雪

虹かくれて天氣騰り、地氣は降りて陽氣塞がる。

太陰（十二月）☷

太陰は陽氣の增進する象にして卦に於ては二陽に尙四陰を殘有す而して月に於ては十二月に相當し、小寒及び大寒の節に當る。

小寒

雁北にむき、鵲始めて巢くひ雉子鳴き初む。

大寒

鷄初に乳しつゝ征鳥厲しく、澤氷閉ぢ。

2、三陽

少陽（二月）☳

少陽は陽氣の增進する象にして、卦に於ては四陽に尙二陽を殘有す、而して月に於ては二月に相當し、驚蟄及び春分の節に相當す。

驚蟄

桃咲き初めて倉庚（ウグヒス）も鳴くこと繁く、鷹化して鳩となる。

春分

玄鳥至り、雷の聲あらはれて、電光見ゆ。

陽明（四月）䷪

陽明は陽氣の充滿せる象にして、卦に於ては六陽を有す、而して月に於ては四月に相當し、立夏及び小滿の節に當る。

立夏

螻蟈（アマガヘル）鳴きて蚯蚓出で、王瓜（カラスウリ）生ず。

小滿

苦菜秀で靡草（ナヅナ）枯れ、麥秋至る。

太陽（六月）䷠

太陽は陰氣の增進する象にして、卦に於ては二陰に倘四陽を殘有す、而して月に於ては六月に相當し、小暑及び大暑の節に當る。

小暑

温風至り蟋蟀も壁に居り、鷹學を習ふ。

大暑

腐草螢となり、土潤ひ蒸して時に大雨至る。

陰陽の數より云へば厥陰と太陰と同じく、少陽と太陽と同じものであるが、これは前に「月と陰陽」の項に於て述べし如く太陽は陰に向つて進むもの、少陽は陽に向つて進むもの、又同じく太陰は陽に向つて進むもの少陰は陽に向つて進むものゝ相違があるのである。

以上陰陽學理の大要を以て經絡に用ひらるゝ三陰三陽の意義は略これを識り得るであらう。

經穴學 終

昭和二年七月二十日初版
昭和十二年七月十四日印刷
昭和十二年七月十八日發行

不許複製

定價金五圓

著者　富永勇　靜岡市紺屋町四十六番地　富永外科醫院內灸療研究所

發行者　奥田三郎　靜岡市紺屋町四十六番地

印刷者　小杉通雄　靜岡市八千代町七十三番地　電話一三八四番

發行所　靜岡市紺屋町　富永外科醫院內　富永灸療研究所　長電二四三番

終